
月読の塔の姫君

館野寧依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月読の塔の姫君

【Nコード】

N0632BA

【作者名】

館野寧依

【あらすじ】

『イルーシャはわたし、わたしはイルーシャ』

今まで情性で生きてきた少女、由希。ある日目覚めたらなぜか絶世の美女になっていた彼女は、古の王妃として第二の人生を歩むこととなる。

これは伝説の姫君と呼ばれた少女とその周囲の人々と国の変化の物語。

00 伝承

緑と魔法の国、ガルディア。

かの大国には伝説となつてゐる美しい眠り姫がいる。

それはむかしむかしのおとぎ話。

アークリッド王の妃、イルーシャ姫は月光のような淡い金の髪と、青い月のような瞳をしたそれは美しい姫君だった。

王とイルーシャ姫はそれは仲睦まじく、お互いを思い合つて穏やかな時を過ごしていた。

しかしある時、姫君は横恋慕した悪しき魔法使いに呪いをかけられ、長き眠りについてしまう。

どうにかして姫の呪いを解こうとした王だが、その方法を知つてゐるのは呪いをかけた魔法使いだけ。しかし、呪いが成就した魔法使いはそれに満足したのか、それ以来姿をくらましたまま行方が知れない。

王は昏々と眠るイルーシャ姫をかき抱き、絶望に嘆き哀しんだ。

その後、優れた魔法使いでもあつたアークリッド王は月読の塔に姫の身を移し、かの王以外誰も近寄ることが出来ないように魔法をかけた。

王は姫が眠りについてからも以前と変わらず足繁く彼女の元へと通い、それは王が退位して死につくまで続いたという。

ガルディア王国の月読の塔に今も姫は眠る。

吟遊詩人たちは詠う。

姫君は長い年月をかけて再び半身たる王と出会つことを夢見てゐるのだと。

01 目覚め

……ん……朝？

瞼越しに光を感じて、わたしは寝返りを打った。

柔らかく体を支える布団の感触に違和感をふと覚える。

うちのベッドのマットレスはこんなに柔らかくない。堅くて、長時間寝るともれなく腰が痛くなるというありがたくないオプション付きだ。

それがなに、このふつかふか。

「……え？」

そこでやっと家のベッドでないことに気づいて、わたしは飛び起きた。

……えーと、ここどこよ？

ベッドの天井から透けるような薄い布が幾重にも垂れ下がっている。いわゆる天蓋というやつだろうか。

天蓋付きのベッドなんて初めて見たよ、それだけじゃなくて寝ちゃったよ、うわあ。それも半端じゃない広さだし。

知らないうちに気を失ってどこぞの金持ちが家のベッドに寝かせてくれたとか？ ……いやいや、そういう場合、普通救急車呼ぶよね、などと、我ながら寝ぼけたことを考えながらベッドの端まで移動しようとした時。

「……なにこの格好……」

自分が中世ヨーロッパに出てくる人物のようなドレスを着ていることに今更ながらに気が付いた。

……なんだ、これは。なにかのコスプレかなにか？

ひらひらでふりふりでふわふわの衣装に、なんだか目眩がしてき

た。

普段ジーンズが多いわたしにはある意味拷問だ。

それに、なんかさつきから視界に金色の髪がちらちらしてるんだけど、これってウィッグだね。それも半端なく長い。間違いなく膝裏まであるだろう。なんでわたしはこんなもん被ってるんだ。

鬱陶しくてしょうがないので、思い切ってそのヅラを引っ張ってみた。

「うぁ」

痛い。

ちよつと涙目になりながら、わたしは地肌から抜けた数本の髪を見つめた。

ひよつとしてこの髪は本物なのでは？ という考えがよぎったが、わたしは頭を振ってそれを否定する。

いやいや、間違いなくわたしは平均的な日本人。わたしの地毛は、染めてない黒髪のはずだ。

なんだか妙なことに巻き込まれているような気がした。

とにかく誰かに会ってこの状況を把握しないと。

そう決心してベッドから降りる。

部屋の中はベッドと同じくアンティークな家具が備えつけられていた。

売ったらいいいくらになるんだろう、と夢のないことを考える。

いや、そんなことを考えてる場合じゃなかった。まず、この状況を分かる人を捜さなければ。

「あのー、誰かいませんかー？」

ドアから顔を出して大声で叫んでみる。

……けれど、期待した返事はない。

「……仕方ない、探しにいくかなあ」

ドレスの裾を踏まないように注意しながら螺旋状の階段を降りていく。

こんな所で下手に転んだら、絶対大怪我じゃすまない気がする。なんだろうこの建物、ひよっとして塔、なのかな……？ 変に縦に長い気がする。

それに窓がないのに妙に明るい。……なのに照明らしきものが見当たらないとはどういうことだ。

不思議に思いながらも、わたしはどこまで続くか分からない階段を降り続けた。

「つ、疲れた……」

いったいどのくらい時間がたっただろう。

なんか変なコスプレしてるのもあって、神経使っていやに疲れた気がする。

塔の出口らしいドアを開けると、幸運なことに庭師らしいおじさん（多分）の後ろ姿が見えた。

自分が妙なコスプレをしているのは気になっていたけど、わたしは思い切ってそのおじさんに声をかけてみることにした。

「……あの、すみません」

ここはどこでしょうと聞こうとした時に、おじさんが振り向いた。

「……ひいっ！」

「うわああっ！」

まるで幽霊を見たかのような反応をされて、ついっられて叫んでしまった。

その反応はちょっと失礼じゃない？ と思っておじさんを見る。

あ、このおじさん、後ろから見たときは気が付かなかったけど、外人さんだ。

日本語が通じるかは分からないけど、やっと会えた人だ、とりあえず話しかけてみよう。

「ちよつと聞きたいことがあるんですけど、あの、他に誰かいますか？」

この言いぐさは自分でもどうかと思ったけど、人の顔を見て腰を抜かしたおじさんではどう考えても話にならないだろう。

おじさんは、ああ、とか、うう、とか意味不明な呻き声をあげながら震える手である方向を指差した。

あ、日本語が通じる人みたい。良かった。

内心ホツとしながら、おじさんが示した方向を見ると、一応舗装されてる小道がある。建物らしきものは見えないけど、多分その方向に人がいることは確かなんだろう。

「ありがとうございます。助かりました」

軽く頭を下げて、その場を後にする。

後ろからおじさんが神よ、とかなんとか呟くのが聞こえてきたけど、気のせいだと思いたい。

まさかホラーなメイクでもされてるんじゃないだろうなと思って顔に触ってみる。

……すべすべだ。

化粧してる感じはしないし、すっぴんとしか思えないんだけど、おじさんのあの怯えようはちよつと気になる。

そんなことを考えながら、小道を歩いていたら。

「塔の結界が消えたと思ったら、まさかこんなことが起こるとはね」
流暢な日本語でそう言ったのは、超が上に付くような美形のお兄さん。なぜかこの人もわたしと同じファンタジー映画に出てくるような格好をしている。

長い金髪に緑の瞳。この人も外人さんだ。

なんか外人率高いな！ と言っても出会ったのはお兄さんを入れて二人だけ。

あのー、もしもし？ 今あなた、どこから出てきましたか？

なんだか突然現れたような気がするんですが。

思わずぼかんとしていると、目の前のお兄さんはちょっと目を見開いてから、わたしをまじまじと見つめた。

「伝承通りだ、月光のような髪と青い瞳」

はい？ この人、今青い瞳って言わなかった？

この鬱陶しいくらい長い髪がウィッグなのは分かるけど、わたしはカラコンまで入れてるのか？ コスプレにしても、なにその徹底ぶり。

わたしにこの格好をさせた人物の執念にちよつと青ざめていると、美形のお兄さんは私の前で片膝をついた。

え、と思つて見ていると、お兄さんはおもむろにわたしの手を取る。

え？ え？ ちよつと、なにする気？

これは、ひよつとして、ひよつとすると。

「まさかあなた様に出会える日が来るとは思いもしませんでした。わたしにとって、これ以上の幸福はございません」

美形のお兄さんはそう言つてにつこりと微笑むと、うやうやしくわたしの手にキスをした！

うわあああつ、まさかと思つたけど、この人本当にやってくれたよ！

「な」

思わず固まるわたし。

生粋の日本人であるわたしにこれは無理。

恥ずかしい。恥ずかしすぎる。

「ああああの、あの……っ」

もの凄くどもつてしまったが、この場合これくらい動揺しても仕方ないと思う。

頬が熱い。きつと今わたしは真つ赤になつてゐるだろう。

わたしの手を離して立ち上がったお兄さんは不思議そうに首を傾げた。

「なにか変だな。君はイルーシャ姫だよね？」

イルーシャ姫？ 誰だ、それは。

「人違いですつ」

ぶんぶんと首を横に振つて否定したわたしに、お兄さんの質問が続く。

「でも、君、塔から出てきたよね。だとしたら、姫としか考えられないんだけど」

「確かに塔から出てきましたけど、わたしは姫とかじゃないですつ。わたしの名前は原田由希。日本人でただの一般庶民です！」

「ハラード・ユーキ？ ニッポン？」

ちよつと、なんでいきなりカタコトになるんですか、お兄さん。

それにハラード・ユーキって呼び方、なんか間抜けでやだ。

「いえ、ユーキじゃなくて、ユキ、由希です！」

「ユーキ」

それからお兄さんとの攻防は少ばかり続いたけれど、結局わたしが折れる形で収束した。

「……もう、ユーキでいいです……」

肩を落とすわたしに、お兄さんは苦笑してごめんね、と謝った。どうやらわたしの名前の発音は外人さんには難しいらしい。

「話を戻すけど、君は姿はイルーシャ姫だけど、中身はユーキっていう女の子なのか」

「さつきからイルーシャ、イルーシャって、誰ですか、それ」

「伝説の姫君。月読つくよみの塔の眠り姫だよ」

「はあ、でんせつのひめぎみ、ですか」

「なんでそこで棒読みになるのかな？ 信じてないみたいだけど、僕は嘘はついてないからね」

お兄さんは苦笑するけど、こんな荒唐無稽な話、信じるという方

が無茶だ。

「……ああ、そうか。君はまだその姿を見ていないんだね？　なら、信じられないのも無理ないか」

お兄さんは頷きながらなにかを呟いた。

そこ、一人で納得しないでください。そう言おうとした途端、周囲の風景が一変した。

「え……ええええっ!？」

さっきまで外にいたはず。なのに今いるのは豪華な内装の室内。

「なんだか随分驚いてるようだけど、ひょっとして移動魔法を知らなかったりする？」

……移動は分かるけど、魔法ってなに。それって、ファンタジー小説とかでよく出てくるあの魔法？

なんかいろいろと妙な展開ばかりで頭が痛くなってきた。

「魔法という言葉は聞いたことはありますが、実際に見たのは初めてです」

こみかみを押さえながら言うと、瞠目したお兄さんに初めて？と聞き返された。

なに、それ驚くようなこと？

とりあえず頷き返すと、お兄さんはふうんと呟いてなにかを考えている素振りをした。

「君がいたニッポンって国には、魔法の概念はあるのに実行はされてなかったのか。実に興味深いけど、今はそれを聞いている場合じゃなかったね。……君も訳の分からない状況で大変だろうけど、まだしなければならぬことが残ってるよ」

そうだった、このコスプレがどうなっているのか確認しなきゃいけないんだった。

お兄さんに促されて、華奢なデザインのいかにも高価そうな鏡の前に立つ。

目に入ってきたのは、儂げなお姫様。

緩やかに波打つ淡い金の髪と、淡い青の瞳。年齢的には少女と女性の間といったところじゃないだろうか。

小さな顔に、それぞれのパーツが絶妙に配置されている、絶世の美貌。

傾国の美姫っていうのはこういう人のことを言うのね。……って、見とれている場合じゃなかった。

これ、もしかしてわたし？ いやいや、まさか、わたしがこんな美女のわけないじゃない。顔の作りからして全然違うし。

無理矢理笑ってみる。お姫様がどこかぎこちない笑みを見せる。思い切り顔をしかめてみる。お姫様が難しい顔になる。右手を挙げてみる。お姫様もそれに合わせて手を挙げる。鏡の前でターンしてみる。お姫様もターンする。

なんだこれは。なんだこれは。なんだこれは。これはもしかして、……わたし？

「なにこれえええーっ!!」

自分に起こった事態を理解した瞬間、わたしは喉も裂けんばかりに絶叫した。

02 王との対面

「ちょっと、笑いすぎ。失礼です！」

腹を抱えて爆笑するお兄さんに、わたしは涙目になって抗議する。確かにさっきのわたしは端から見たら変な人だったかもしれないけれど。

「ごめん、ごめん。まさか叫び出すとは思わなくて。でも、これで状況は理解できたみたいだね」

無然としているわたしに、笑いをこらえているお兄さん。頼みますから、わたしのさっきの奇行は忘れてください。

「姫が目覚めたとなったら、王に知らせないとならないんだけど。」

僕は目通りの許可を貰ってくるから、君のことは侍女達に任せるけど、いいかな？」

「ちょっと待つて、『おう』つて、王様！？」

「わたし、王様に会わないといけないんですか？ それにここはどこなんですか？ わたし、これからいったいどうなるんですか！？」

わたしは浮かんでくる疑問を矢継ぎ早に出した。

だって、いきなりこんな美女になって、王に会わせるだなんて言われたら訳分からないよ！

「ここはガルディア王国。君から見ればたぶん異世界だよ。ここにはニッポンなんて国は存在しないしね」

「異世界……？」

あまりのことに呆然とお兄さんを見る。その顔は真面目そのものだ。

確かに魔法なんてものがあるし、日常では考えられないことだけだ。

「信じられないかもしれないけど、夢でもなんでもなくて、これは現実だよ。……君には気の毒だと思うけど」

「嘘……」

嘘だよ、日本が存在しないなんて。じゃあ、わたしはどこに帰ればいいの？

混乱のあまり涙が浮かんでくる。

「……ああ、泣かないで。酷かもしれないけれど、絶対に悪いようにはしないから」

お兄さんが指を延ばしてわたしの涙を拭いてくれる。

「そのために王に会うことは重要なんだ。……君がその姿でいることも関係あるしね。いきなり王と対面なんて不安かもしれないけれど、僕も同席するから我慢してね。それから王の名はカデイスっていうんだけど、彼は僕と歳も近いし、そんなに緊張する人物でもないから大丈夫だよ」

安心させるようにそつと頭を撫でてくれるお兄さんに頷くと、ほつとしたように彼は微笑んだ。

わたしから離れて、じゃあまたね、と言ってその場を去ろうとしたお兄さんにわたしは慌てた。

わたし、お兄さんの名前聞いてない！

「あのっ、お名前伺ってもいいですか？」

今気づいたとばかりに、ああ、とお兄さんは立ち止まる。

「これは失礼しました。わたしはキース・ルグラン・レグ・アレギリア。ガルディア王国の魔術師師団長を務めています。以後よろしくお願いいたします」

胸の前で右腕を掲げ、丁重にお兄さん、じゃなくてキースさんは言った。

美形はなにをやっても絵になるなあなんて頭の隅で考えながら、わたしも慌てて言う。

「あ、はい。こちらこそ、よろしくお願いします」

キースさんはその言葉に微笑んで頷くと、それじゃあね、と部屋を出ていった。

それから程なくしてドアを叩く音がしたので、はいと返事したら、キースさんが言った侍女と思わしき人が入室してきた。

だいたい四十歳くらいだろうか。栗色の髪をひつつめた青い瞳のその人は、とても品の良い感じがした。

「失礼いたします。わたくしは侍女長を務めております、リイナと申します。僭越ながらわたくしがイルーシャ様のお世話をさせて頂きます。伝説の姫君にお仕えできるなんて、わたくしは果報者ですわ」

……侍女長といったら結構偉い人なんじゃないだろうか。そんな人に頭を下げられて、ここまでへりくだられると、逆にこっちが恐縮してしまう。

「こちらこそよろしくお願いします。目覚めたばかりで、事情がよく分からないのですが、よろしくご指導をお願いします」

「まあっ、わたくしのような者にそんなお言葉をかけて頂けるなんて。イルーシャ様はなんて素晴らしい方なのでしょう。わたくし、誠心誠意あなた様にお仕えさせて頂きますわ」

ぺこりと頭を下げたわたしに、心底感激したようにリイナさんは言った。

いや、中身は一般庶民なので、リイナさんの方が偉いんですとは、この場合、言わない方がいいんじゃないだろうか。

「それでは支度の準備をさせて頂きますね」

リイナさんが手を叩くと、さらに二人の侍女が現れた。

だいたいわたしと同じくらいの歳だろうか。二人はそれぞれシェリーとユーニスと名乗った。

「まずは、ご入浴して頂くことになります」

ご入浴……お風呂！？

リイナさんに手を取られてだっ広いお風呂場に連れて行かれたいや、お風呂場というより、立派な浴場と言った方が正しいかも知れない。

その豪華さに見とれていると、ユーニスさんとシェリーさんがわたしの着ていたドレスを脱がしにかかった。

ひいい、なにをするの！？

思わず二人の手を払いのけようとして、わたしははた、と我に返った。

リイナさん達にとっては、あくまでもわたしはイルーシャ姫なんだ。姫はこんなところで暴れたりしないよね。

耐えろ、わたし。温泉施設だと思えば恥ずかしくない…… かもしれない。ただし、わたし以外の侍女さん達は服着てるけど。

同性とはいえ、他人に衣装を剥かれる羞恥と戦っていると、リイナさん達に感嘆したような溜息をつかれた。

「まあっ、なんて魅力的なお体なんでしょう。輝くような白いお肌といい、どんな殿方もイルーシャ様の前ではいちころですわ」

うつとりとそう言ったのは赤みがかった金髪に榛色の瞳のユーニスさん。リイナさんとシェリーさんも同意するように頷いている。

「そ、そう……」

見下ろしてみると、確かに出るところは出て、引つ込むべきところは引つ込んでいる体つきをしている。

こんなところまで完璧なのか。イルーシャ姫、恐るべし。

その後のことはあまり思い出したくない。

とりあえず、リイナさん達に体の隅々まで洗われてしまったことだけは言っておく。

でもまあ、侍女さん達に洗ってもらって正解だったと思ったのは、髪。

あまりにも長すぎるので、一人じゃ洗うのはきつと大変だったろう。

いつそ切った方がと提案したら、侍女さん達に揃って「こんな見事な御髪をとんでもない！」と反対された。

いやー、でも毎回侍女さん達に洗って貰うのもなあ。それにやっぱりお風呂は一人でゆっくり入りたいのよ。

でも無理なんだから、と今日一日でいろいろと諦めながら、お風呂からあがったわたしは、リイナさん達に手際よく着付けをされた。

「まあ、瞳と同じ色のドレスがよくお似合いですわ」

淡い青色のドレスを身につけ、小さな白い花を髪に編み込んだ姿は、清楚で可憐と言うのにふさわしく、確かに似合ってる。

それからリイナさんが、支度ができたことをキースさんに連絡しに行つて、ようやく王様とご対面、という段になった。

わたしを見たキースさんは瞳を見開いてから、少し眩しそうに目を細めた。

「とても綺麗だ」

「ありがとうございます」

うん、イルーシャ姫がね。

わたしは人に褒められるのがとても苦手なんだけど、本来と外見が違いすぎるせいかな、どうも他人事のようにしか感じられないんだよね。だから、こんなふうにさらっと流せてしまう。

「本来なら謁見の間で行うのが正式なんだけど、執務室になってしまつてごめんね？」

「いえ、その方がこっちも助かりますから」

キースさんはいかにもすまなそうに言うけど、そんなに仰々しくやられてはこっちが困る。わたしはあくまでも一般庶民なのだ。

キースさんが王の執務室のドアを叩くと「入れ」という返事が返ってきた。

わたしはキースさんに促されて入室する。

書類が積まれた立派な机の椅子に座っていたのは、肩を覆うくらいの漆黒の髪と、藍色の瞳の男性だった。

キースさんが中性的な美形とすれば、王様はいかにも男性的な感じの美形。

この人が王様。

どうしよう、なにか挨拶したほうがいいのかな。

「あの……」

なんとか絞りだそうとした声を王様が遮った。

「なぜ、よりによって俺の代になって目覚めるんだ、おまえは」

言外になんてことをしてくれただという言葉を含みながら、王様は心底嫌そうな顔をした。

「いきなりそういうこと言うのは、どうかと思うよ」

不機嫌を露わにする王様に、すかさずキースさんがフォローを入れる。が、既にわたしの中で王様の印象は最悪に近い。

「どう言い繕おうが、俺にとって迷惑な存在であることに変わりはない」

「あの、わたしはそんなに迷惑な存在なんですか？」

つい、間の抜けた質問をしてしまつた。でもあの侍女さん達は少なくともわたしに好意的だった。

「ああ、迷惑だな。分かったら、とつとと塔に戻って眠りにつけ。そして二度と目覚めるな」

その一方的な言い方に思わずムカつてきた。

「いくらなんでも、そこまであなたに言われる筋合いはないですっ」

「俺にはそう言える権限がある。王だからな」

「へえ、そうなんですか。だとしたらとんでもない暴君ですね。こんな王様を上に乗っている国民がかわいそう」

「なんだと、もう一度言ってみろ」

「何度だって言うわよ！ 暴君！ 暴君！ 暴君！ 暴君！」

もう敬語とかどうでも良くなってきた。もうこいつに丁寧な言葉を使うのも嫌だ。

「きさま……」

「だいたいなに、目覚めたら見たこともない場所で、伝説の姫君とか言われて、あげくの果てには二度と目覚めるな？ ふざけんじやないわよ」

やばい、感情が高ぶりすぎて止められなくなってきた。不覚にも涙が浮かんでくる。

「わたしだつてね、好きでこんなところにいるんじゃないのよ！ 元の体に戻るなら喜んで戻ってやるわ！ 分かったか、この馬鹿王
っ！！」

一瞬の沈黙の後。

ぜいぜいと肩で息をするわたし。爆笑するキースさん。啞然とする王様。

涙目でキツと睨むと、王様はなぜか後ろに少し仰け反った。

その顔は反則だよ、とキースさんが呟くのが聞こえたけど、憤っているわたしはそれどころじゃない。

「キース、この女を追放しろ」

「お言葉だけどね、カデイス。この国にとって貴重な観光資源をみすみす追放させる訳にはいかないね」

観光資源で……珍獣扱いか！

気がつかなかったけど、キースさんって結構いい性格してる。

「伝説の姫君が目覚めたことで、この国にもたらされる経済効果は計り知れない。それを他国に持って行かれるかも知れないけど、それでもいいのかい？」

「それは……」

たたみかけるように言うキースさんに、王様の言葉が詰まる。

「じゃあ、わたしはこの国にとって大切な客人なわけね？ じゃあ、せいぜい丁重に扱ってもらわなくちゃね。よろしくね、カデイス！」

今までの鬱憤を晴らすべく、嫌味たっぷりに王様を呼び捨てにしていた。

「君もいい性格してるよなあ」

感心したようにキースさんが笑う。

「カデイスを呼び捨てにするなら、僕もキースと呼んでもらおうかな。丁寧な言葉もいらないから」

「え……と、キース？」

「うん、そう。カデイスばかり親しげに名を呼ばれたら、ちょっと癪だしね」

「誰が親しげだ！」

これに関してはカデイスの言葉に賛成だ。

どうやったらこれが親しげに見えるのキース。こいつはわたしの敵だよ。

呆れていたその時、扉がノックされる音が響き、キースがその応対に出た。

その間、わたしは天敵を睨みつけている。

「……可愛くない女だな」

「別にカデイスなんかに可愛いなんて思われたくないし！」

カデイスとわたしが見えない火花を散らしていると、不意に何々とした笑い声が響いた。

03 確認

声がした方を見ると、七十歳くらいの白髪のおじいさんが楽しそうに笑っていた。

その後ろには二十代後半くらいの薄茶色の髪をした男の人が頭が痛いともいうように額を押さえている。

「伝説の姫君は随分と個性的な方のようにじゃの」

「……個性的にも程があると思うが。いくら古の王の妃でも現王を馬鹿王呼ばわりとは」

不機嫌を隠そうともせずにカデイスが言う。

ちよつと待って、今変なこと言ってたような気がする。

「古の王の妃ってなに？」

首を傾げながらそう言うのと、キース以外の人に凝視された。

え……なに、わたしなにか変なこと言った？

「五百年前の王、アークリッド王の妃って事だよ」

誰も言葉を発しないのでキースが説明してくれたけど、初めて聞く名前だ。

「アークリッド王？ 誰それ」

「呆れた女だな、おまえは。アークリッド王の人生を狂わせておきながら、その王のことも忘れたのか」

「なに、ひよつとしてイルーシャ姫って物凄い悪女だったりするの？」

そのわりにはリイナさん達の態度は随分と友好的だった気がするんだけど。

「おまえ、何を言ってるんだ。まるで他人事のように……」

「仕方ないと思うよ。実際、他人事だからね」

眉を顰めるカデイスに、キースが肩をすくめて言った。

「おまえまでなにを言ってるんだ、キース」

「信じられないかもしれないけど、この娘、姿はイルーシャ姫だけ

ど中身はユーキって女の子なんだ」

「……失礼ですが、キース様。そんなことが起こりうるのでしょうか」

今まで黙ってた薄茶色の髪の男の人が堅い調子で言う。

「禁呪の魂換えなら考えられるけど、ただ、この娘異世界人なんだよね。その点で人物の特定が必要な魂換えが可能とは思えない」

「……異世界人だと？ なにを馬鹿なことを」

「ユーキ」

よく分らない話をぼうつとして聞いていたわたしは、いきなり名前を呼ばれて慌てた。

「な、なに？」

「君がどこに住んでたのか話してごらん」

「わたしは」

注目されてちょっと緊張しながら言いかけた時、ドアがノックされた。入ってきたのはリイナさん。

「失礼いたします。皆様、陽の間にお集まりになりました。お食事の準備も出来ておりますが、いかがなされますか」

「そうだね、主要な人物には事情を説明しておいたほうがいいかもね。紹介もしたいし、すぐ移動するよ。リイナも一緒に来て」

「かしこまりました」

キースの移動魔法でその場にいた全員が別の場所に移動した。

この魔法は二回目だけど、こんな大人数でも移動できるんだ。すごいな。

素直に感心して室内に目をやると、そこには騎士みたいな格好をした三人の男の人がいた。その内の一人はとんでもない美貌の持ち主だ。

この人達もキースが言っていた主要な人物なのかな。

「とりあえず席に着こうか。ああ、ユーキはここに座って」

キースに椅子を引かれて、わたしは長テーブルの端に着席する。

わたしの目の前にはカデイス、左隣にはキースが座った。

カデイスの横には白髪のおじいさん、薄茶色の髪の人、二十代半ばくらいの赤っぱい黒髪の人が着席。

反対側のキースの横には、焦げ茶の髪の四十歳くらいの人、二十代前半と思われる蜂蜜色の髪の人が着席した。

「では自己紹介といきますかな。わしはこの国の宰相を務めているアリストと申します」

白髪で青い瞳のおじいさんが人の良さそうな笑顔を浮かべて言う。
「わたしは宰相補佐のイザトと申します。以後よろしくお願いいたします」

アリストさんの隣に座っている薄茶色の髪に水色の瞳をした男の人が堅い調子で言う。なんというか顔は彫像のように整っているんだけど気難しそうな人だ。わたしはその言葉に慌てて頷く。

カデイス、わたし、宰相、キース、宰相補佐……この席順ってもしかしくなくても偉い順だったりする？

「わたしは近衛騎士団団長のダリルと申します。イルーシャ様、よろしく願い申しあげます」

キースの隣の焦げ茶の髪に黒い瞳のその人はとっても渋かった。端正な顔といい、若い頃は相当もてたんじゃなかるうか。

「彼はそこにいるリイナの夫だよ」

キースにそう言われて、わたしは後ろに控えているリイナさんを振り返ると、リイナさんは肯定するように頷いた。

「うわー、こんなかつこいい旦那さん、いいなあ。でもリイナさんも美人だし、とってもお似合いだ。」

「わたしは紅薔薇騎士団団長、ブラッドレイと申します。伝説の姫君にお目にかかれて身に余る幸せにございます」

赤みがかった黒髪に赤い瞳の瞳のその人は、どこか気障っぽくそう言った。

この人も美形で、いかにももててそうな空気を放っている。あ、こういうのをフェロモンというのか。

「わたしは白百合騎士団団長ヒューイと申します。よろしくお願い

申し上げます」

蜂蜜色の髪と紫の瞳をしたその人は、わたしの予想に反して、
とてもハスキーな声だった。

ものすごい美人。いや、男の人だって分かってるけど、とにかく
美人。

キースが中性的な美形だとしたら、この人はより女性的な感じの
する美形だ。

わたしがぼかんとしてその人を見つめていると、キースがくすく
すと笑って言った。

「美人だろ、彼。十代の頃なんて絶世の美少女と呼ばれていたんだ
よ」

「……へえ、そうなんだ」

「……キース様！」

頬を染めて抗議する姿はどこか可愛くて、美少女と呼ばれていた
のも大いに納得した。

それにしてもこのメンバー、やたら美形揃いだなあ。アリストさ
んの若い頃はどうかだったのかは本人に聞いてみないと不明だけど。

「あ、わたしは由希、原田由希です。日本から来ました」

わたしがそう言つと、事情を知らない三人の騎士さん達が不思議
そうな顔をした。

「……失礼ですが、あなたはイルーシャ様では？」

ダリルさんが至極もつともな質問をしてくる。

「ええと、体はイルーシャなんですけど、中身は原田由希なんです」

「は？」

三人にそう返されて、わたしはどう説明しようかと思案する。

こんな話、当の本人であるわたしでさえ信じられないのに、他人
が訳分らないのは当然だ。

「見る、キース。こんな荒唐無稽な話、誰も信じないぞ。おまけに
この女が異世界人だと？ おまえ、この女におかしなことでも吹き
込まれたんじゃないのか？」

「ちょっと、失礼なこと言わないでよね。それじゃ、まるでわたしがだましてるみたいじゃない」

「実際そうだろう」

「カデイス、ちょっと黙っててくれないかな」

キースが王であるカデイスの言葉を遮ってそう言ったのには、わたしもびつくりした。

こ、これは俗に言う暗黒微笑というやつでは？

どこか黒いオーラを放ちながらキースが微笑む姿は恐怖以外のなものでもない。

「ユーキのいたニッポンという国はどんな国なんだい？」

キースに聞かれて、わたしは慌てて少ない知識を総動員する。

「ええと、日本は四方を海に囲まれた島国だよ。工業が盛んなか。

一応経済大国って言われてる」

「……島国で経済大国。聞いたことないですね」

イザトさんがこめかみに指を当てて考える仕草をする。

「あ、じゃあ、アメリカは？ ロシア、イギリス、フランス、イタリア、ドイツ、オーストラリア」

とりあえず思いついた国の名前を列挙してみる。

「どれも知らん。キース知っているか」

「どの国もこの世界には存在しないよ。だから言っただろう、ユーキは異世界人だって」

「しかし、それもその女の作り話だと言えなくもないぞ」

「彼女はイルーシャ姫やこの世界のことについて知らなさすぎる。

実際に鏡で自分の姿を見て驚いてた彼女を目にすれば、カデイスも納得すると思うよ」

うああ、お願いだからキース、あの時のことは忘れて！

思わず赤面して頬を押さえるわたしをカデイスはまじまじと見つめると、やがて溜息をついて言った。

「……おまえがそこまで言うのなら仕方ない。一応信じてやる」

「分かってくれたようで嬉しいよ。……じゃあ、食事にしようか」

キースのその言葉を合図に、テーブルに料理が運ばれてくる。

焼きたてのパン、豆のスープ、魚介類を炊き込んだピラフのようなもの。薄くスライスしたジャガイモと挽肉と炒めたタマネギを重ねてパイ生地で包んだ料理。手羽をニンニクで風味付けしてローストしたもの、白身魚のソテー、茹でた野菜などが大皿に盛られている。

ここの食事は大皿に盛った料理を各自で取る形式らしくて、食事のマナーもそう煩くなさそうなので私はほっとする。

「ユーキ、取ってあげるよ」

キースがわたしの分の料理を全部取ってくれた。

「え、ちよつとキース、わたしそんなに食べられないよ」

「どれが君の口に合うか分からないからね。無理して食べることもないし、残していいから」

……キースのこういうところは、いいところの出なんだなあとと思う。庶民のわたしには料理を残すのがちよつと心苦しいんだけどな。そう思いながら、淡い緑色をした豆のスープをスプーンですくって口に運ぶ。

「あ、おいしい」

裏ごしして口当たりを良くしたスープは豆の風味と塩加減が絶妙で、思わず口元が綻ぶ。

「パンにスープやソースをつけて食べてもいいんだよ」

「あ、そうなんだ」

早速言われたとおりに焼きたてのパンをちぎってスープにつけて食べてみた。うん、おいしい。

「ここにもお米ってあるんだね。日本のお米と違って細長いけど」
ピラフもどきをすくって食べてみる。うわ、味もピラフそのものだ。ちよつと嬉しい。

「米がおまえの国にもあるのか」

「うん、一応主食だよ。パンや麺類を食べることも多いけどね。それにしても、ここの料理がわたしのところと似通ってて良かった」

「ほお、異世界でも似たような料理があるとは、不思議なことがあるものじゃの」

アリストさんが感慨深げにそう言ったのを聞いて、わたしはふいに疑問を持った。

「ね、ここが異世界なら、なんで言葉が通じてるんだろ？ わたしの世界では、日本以外の国に行くと言葉が通じないんだけど」

まあ、英語みたいな公用語はあるけどね。

「それは、君がイルーシャ姫の体に入っていることが要因なんじゃないかな。君はこの言葉を普通に話してるよ」

「え、そうなの？」

「うん、たまに分からない単語が混じるくらいだね」

今まで日本語しゃべってるとばかり思ってたから、これには驚いた。

「……そうなんだ。あ、でも、話すのはともかく書く方はどうかかな？ さすがにこれは自信ないけど」

「おまえには専任の教師をつけてやるから安心しろ。たっぷり絞らせてやるから覚悟しておけ」

「ええ……」

カデイスの容赦ない言葉に、思わず情けない声が出た。そのくらいわたしは勉強というものが苦手なのだった。

キースが噴き出したのを機に、その場は穏やかな笑いに包まれた。

04 動揺

「勉強は仕方ないからやるけど、できれば元の世界に早く帰りたいんだよね……」

溜息をつきながら白身魚のソテーを切り分けていると、突然周囲が静かになった。

あ、でも、目覚めたわたしはこの国にとって貴重な観光資源なんだっけ。

だとしたら、わたしが元の世界に戻るのは彼らにとって不利益なんじゃないかな。

「……もしかして、帰れないってことはないよね？」

言っててだんだん不安になってきた。

ひよつとすると元に戻れずに、ずっとイルーシャのまま、とか……。

「……一応、過去にそういう例がないか調べてみるよ。心配だろうけど、できる限りのことはするから、そんな顔しないで」

キースが慰めるように言う。

わたし、そんなに情けない顔してる？

「しかし、妙な期待を持つより、帰れないと思っておいた方が賢明ではないか？ そんなことを考えていたら、いつまでたってもこの環境に順応できないぞ」

「な……」

カデイスの言葉は正論だろうけど、酷すぎる。

いきなりこんなことになったわたしの気持ちなんてカデイスには分かんないよ。

「陛下……、それはあまりにも……」

ダリルさんがカデイスを諫める。

「カデイス、言い過ぎだよ。それに帰れないと決まった訳じゃない」

「だがな、キース、おまえも言っていたではないか。この女はこの

国にとって貴重な観光資源なのだと。ならば、無理に帰すこともないだろう」

なにそれ、二度と目覚めるなって言ったのはカデイスじゃない。それを……今になってそんなこと言うの？

「それは言ったけど、なにもこんな時に言うことはないだろう？」
カデイスはすぐく意地悪だ。いくらわたしを嫌ってるからって、こんなやつて酷すぎるよ。

気が付いたら、わたしはぼろぼろと涙をこぼしていた。

「ユーキ……」

みんなの前でみつともなく泣き出してしまったわたしは恥ずかしくて顔を覆う。

こんなことで泣くなんてどうかしてる。

「ご、ごめんなさい、わたし……っ」

「……なにを泣いている。別に泣くようなことではないだろう」
なぜか動揺したような声でカデイスが言う。

「イルーシャ様」

控えていたリイナさんがわたしにハンカチを差し出してくれた。それをありがたく借りて目元に当てる。

「わ、わたし、もう部屋に戻るね。食事ごちそうさま」

いたたまれなくて、わたしは席を立つ。

「……部屋に送るよ。リイナ、付いててあげて」

「かしこまりました」

キースが移動魔法を唱えて、わたしは自分に割り当てられた部屋に戻った。

「……イルーシャ様、なにかお飲みになりますか？」

「ううん、いいです。ごめんなさい、今日はもう休みます」

「……そうでございますか。ではお召し替えを」

着ていたドレスを脱いで、リイナさんに寝間着に着替えさせてもらった。わたしはそのまま寝室に向かう。

「おやすみなさい。……今日はごめんなさい」

「……イルーシャ様が、お気になさることはないのですよ。それではおやすみなさいませ。明日の朝、また参ります」

優しくそう言ってくれて、リイナさんが退出する。

わたしはベッドに沈みこむと、枕に顔を押しつけ声を殺して泣いた。

会いたい。

普段は空気のように思ってたのに、こんなことになった今になって、無性にお父さんとお母さんに会いたかった。

帰りたい、うちに帰りたいよ。

手抜きでもなんでもいいから、お母さんの料理が食べたい。

これが夢じゃないとしたら、向こうのわたしの体はどうなってるんだろう。

「由希いいい　っ!!」

誰かが絶叫する声で、わたしははっと目が覚めて起き上がる。

まだ起きるには早い時刻らしく、まだ周囲は薄暗い。

なんだか嫌な目覚め方。

あの声、どこかで聞いたことある気がするんだけど誰だっけ……？

ドキドキしている胸を押さえながら考えて、あれがお母さんの声だということに気が付いた。

家族のこと考えながら眠ったから、あんな夢見たのかな。

今頃わたしの体、どうなってるんだろ。

イルーシャ姫みたいに眠ったままか、最悪、意識不明とか……？
そうだとしたら早く帰らないと。

いくら放任の両親でも、心配かけてるだろうな。

溜息をついてから、もう一度寝ようと横になる。けれど眠気はもう訪れず、周囲が明るくなるまで、まんじりもしないでわたしは

ただ時間が過ぎるのをベッドの上で待った。

「失礼いたします。イルーシャ様、起きていらつしやいますか？」

「あ、はい。起きてます」

リイナさんに声をかけられて、わたしは豪華な天蓋付きのベッドから這い出た。

「キース様からお花が届いておりますよ」

キースって本当にまめな人だな。

花瓶に生けられた青を基調とした花を見て、ちよつと気持ちが浮上する。

今日はシェリーさんにお風呂に入れてもらった。ちなみにシェリーさんは淡い栗色の髪と瞳の美人。

シェリーさんと呼んだら、シェリーとお呼びくださいと言われて戸惑った。

「ユーニスやわたくしも是非そうお呼びください。イルーシャ様、わたくし達には普段通りの口調で良いですよ」

リイナさんにそう言われたので、わたしと歳が近いシェリーさんとユーニスさんは、さん付けをやめることにした。

さすがにリイナさんと呼び捨てにはできないと言ったら、苦笑されながら承諾してくれた。……ああ、良かった。

朝の支度と食事を終えて、アッサムミルクティーに似た感じのお茶を飲んで一息入れる。

ころんとした丸い形の茶葉はスパイスやミルクと一緒に煮込んでチャイみたいなお茶にすることもあるそうだ。

コーヒーはないんだろうかと思ってリイナさんに聞いてみたら、どうやらないらしい。残念。

「イルーシャ様、ブラッドレイ様とヒューイ様がいらしてますが、いかが致しますか」

ああ、昨日会った騎士団長の人達か。

「あ、お通ししてください」

しばらくして、花束を手にした二人の騎士団長が現れた。

「イルーシャ様、ご機嫌はいかがですか」

「あ、はい。今日は大丈夫です」

そう返しながら、それぞれの団の名を表す花束を受け取った。
…それにしても、紅薔薇と白百合ってすごい団名だね。

わたしが二人に座ってもらうように促すと、シェリーが頬を赤く染めながら新たにお茶を淹れて持ってきてくれた。

ブラッドレイさんがお礼を言くと、シェリーはさらに真っ赤になつて慌てたように退出していった。いやはや美形の威力はすごいなとわたしは妙な感心をしてしまった。

「あの……ブラッドレイさん、ヒューイさん、昨日はすみませんでした」

わたしが昨日の非礼を詫びると、二人は微笑んだ。

「いいですよ。イルーシャ様が気になさることではありません」

「あと、我々に敬語は必要ございません。どうぞ、ヒューイ、ブラッドレイとお呼びください」

その美貌にあまり似合わない堅い口調でヒューイさんが言う。

「え……でも、わたし中身は庶民ですし」

年上のいかにも貴族然とした二人を呼び捨てにするのは気が引けた。

「陛下に敬称をつけていらっしやらないのに、我々に丁寧な言葉遣いはまずいでしょう。……聞きましたよ、なんでも陛下を馬鹿と言われたとか」

ブラッドレイさんが多少砕けた口調で冗談めかして片目を瞑る。

「あ、あれは……っ」

確かにあれは自分でも暴言だったと思う。

カーツと顔に血が上るのを感じて、わたしは頬を押さえた。

「あれは、カデイスが失礼なこと言うから……っ」

「……失礼なことですか？」

「なんでも、わたしはカデイスにとって迷惑な存在らしいですよ。とっとと塔に戻って眠りにつけ、そして二度と目覚めるなど言われました」

「それは……酷いですね」

ヒューイさんが額に手を置いて唸るように呟いた。

「陛下も物言いが少しきついところがありますからね」

「……少しですか？」

「いえ、かなりですね」

わたしの疑問にブラッドレイさんが苦笑いを浮かべて訂正する。

「イルーシャ様、先程も言いましたが、我々に丁寧な言葉はいりませんから。できればブラッド、ヒューと呼んでいただけると嬉しいですね」

「分かりま……、う、うん、分かった。じゃあ、わたしにももう少し砕けた口調で話してくれると嬉しいな」

「イルーシャ様がそう言うのでしたら。公式の間では無理ですけどね」

「うん」

堅苦しいのは苦手なので、わたしはほっとする。

「あ、そういえばカデイスのことなんだけど、よりによってなぜ俺の代で目覚めるんだって言ってたけど、どういう意味なのかな？」

わたしがそう聞くと、二人は一瞬の間を置いて、お互いの顔を見合わせる。……いったいなんだ？

「……それは、世論があなたを陛下の妃にと押すからだと思いますよ」

「……はあ？ なにそれ？」

想像を超えた話にわたしはぽかんとする。

「……この国では結婚歴のある人間を王妃にできるの？ 普通無理だよ」

「……そうですね、普通は無理ですね」

ヒューがわたしの言葉に頷く。

「わたしの世界の他の国の話だけれど、離婚歴のある女性と結婚するために退位した国王がいるよ。王冠を賭けた恋と呼ばれてるけど」

「王冠を賭けた恋か、なんとも情熱的な話ですね」

ブラッドが意味ありげに流し目をくれる。

「……なんだろ？」

「ブラッド、イルーシャ様にまで色目を使うのはやめろ」

あ、そういうことなんだ。

「気にしてないから、大丈夫だよ」

「……いえ、少しは気にしてもらえると嬉しいのですが」

こころなし肩を落としたようにブラッドが呟いた。それを無視してヒューが続ける。

「……話を戻しますが、この国は他の国と違って特殊な事情があるんです。イルーシャ姫が目覚めたら、その代の王か王子が姫と結ばれると言われています」

「へえ、そうなんだ」

「……あれ、今なにか変なこと言わなかった？」

もう一度、ヒューの言葉を思い返す。

イルーシャ姫と、王か王子が結ばれるとか何とか。

イルーシャ姫はわたし。王は力デイス。……ってことは、力デイスとわたしが結婚するってこと？

「え、ええええ？」

「イルーシャ様、反応が遅すぎます」

ヒューのその突っ込みにも激しく動揺したわたしは言い返すことができなかった。

05 天敵

「カデイスと結婚なんて冗談でしょ？」

まあ、向こうもそう思ってると思うけど。

「イルーシャ様、そうは言いますが、民意というものは無視できないものですよ」

「それはそうかもしれないけど、お互い嫌いあってるのに、結婚なんて無理でしょ」

真面目に言ってくるヒューに、正直唸りたい気分では返す。

「……陛下のことが嫌いなんですか？」

「ああまで言われて好きになる方がどうかしてると思うけど。わたしにとってカデイスは天敵だよ」

「天敵か、これはいい」

なにがいいんだかよく分からないけど、ブラッドが膝を叩いてウケている。

「まあ、陛下はそこまであなたを嫌ってるわけではないと思いますよ。いや、むしろ……」

「むしろ……、なに？」

意味ありげに言葉を濁すブラッドにわたしは首を傾げると、彼はふっと笑って首を横に振った。

「いや、俺が言うようなことではありませんね。もしかしたら、そのうち陛下からなにかあるかもしれませんよ」

「……なにそれ？ 全然訳分らないよ」

「いいんですよ、無理にお分かりにならなくても。では、そろそろ我々はおいとましますよ」

えええ？ ちょっと、それって言い逃げじゃないの？

「おい、ブラッド」

「おまえにはきちんと説明してやるから」

そう言って、せき立てるようにブラッドがヒューの肩を軽く叩い

た。

「それでは失礼します、イルーシャ様」

「失礼いたします」

ブラッドとヒューがそれぞれ騎士の礼をして部屋を退出する。

「……なんなの？」

一人残されたわたしは疑問符だらけだ。

そんなところに、シェリーがやってきた。なんでも、エトール侯爵令嬢のアイリン姫がわたしに面会を求めているという。

……なんだか来客の多い日だなあ。

面識はないけど、身分の高い人みたいだし、会った方がいいのかな。

そう思っただけで通してもらおうように言つと、しばらくして鈴を転がすような声が響いた。

「まあっ、伝説の姫君が目覚められたという噂は本当だったのですね！ おとぎ話にある通り、本当にお綺麗な方！」

現れたのは金髪碧眼のお姫様。

うわあ、可愛いなあ。

いかにも純真無垢そうな可憐な姫に、わたしは目を細める。

わたしは一目でこの可愛い姫が気に入ってしまった。

「はじめまして。エトール侯爵の娘、アイリンと申します。イルーシャ様、よろしくお願い申し上げます」

「こちらこそ、よろしくお願いいたします」

わたしも見よう見まねで挨拶を返す。それからアイリン姫に席に着いてもらった。

シェリーに女の子が好きそうなお茶菓子とお茶を出してもらってわたしとアイリン姫のお茶会が始まった。

「実はわたくし、目覚めたばかりで記憶が抜け落ちておりますの。ですから、伝説の姫君などと呼ばれて少々戸惑っています。もしよろしければ、その伝説というものをお話頂けるとありがたいのですけれど」

わたしのお姫様言葉、変じゃないよね？

この言葉遣いは疲れるけど、アイリン姫にとっては、わたしはあくまでイルーシャ。伝説の姫君なのだ。その姫君のイメージを崩すようなことは、なるべくしないようにしないと。

でもまあ、わたしの即席お姫様言葉はどうやらアイリン姫に通用したようだ。

アイリン姫は瞳を見開いて、まあ、と頬に手を当てると、お気の毒に、と呟いた。

アイリン姫の口から紡がれたのは、五百年も昔の物語。

悪い魔法使いに眠りにつかされた王妃が、再び半身たる王に巡り合うのを待っているというおとぎ話だった。

それに加えて、この国ではイルーシャ姫が目覚めれば、その代の王が王子がアークリッド王の生まれ変わりであるということが通説のようになっていいることも話してくれた。

ああ、だから力デイスはわたしによりによって俺の代でと言ったんだ。

そんな人物が突然目覚めたら確かに鬱陶しく思うだろう。

……だからって、あの態度はどうかと思うけどね！

「あの……大変不躰ではありませんけれど、本日はわたくし、イルーシャ様にお願いがあつて参りましたの」

「……お願いですか？」

わたしがその先を促すように首を傾げると、姫は自分の手をきゅつと握りしめて思い詰めたように言った。

「はい、実はわたくし、陛下の妃候補なのです。ですが、わたくしには事情がありまして、なんとかそれを辞退することはできないものかと考えまして……。そんな時にイルーシャ様が目覚められたと聞き及びましたので、図々しくもこちらに押しかけて参った次第ですの」

なんでも、アイリン姫には幼馴染みに想い合っている人がいるらしい。

同じくらいの家格らしいので、その人と結婚するのはなんの不都合もないらしいのだけど、婚約を発表しようとした矢先にカデイスから姫の父親へ興入れの打診があったらしい。

その為、幼馴染みとの婚約話は立ち消え。

王と普通の貴族じゃ、王の意志が優先されるに決まってるものね。「イルーシャ様が目覚めてくださって、本当に助かりましたわ。もうわたくし達、二人で駆け落ちする覚悟までしておりますもの」「駆け落ちする覚悟っていったら相当だよな。今までなに不自由なく生活していた家や家族を捨てるほどの覚悟。

わたしには好きな人がいたことないから、その気持ちはよく分からないけれど。

「それほどまでに想い合っているのなら、わたくしが王に事情を話しますわ。言ってお分かりにならない王ではありませんもの。大丈夫、姫が心配なさることなど、なにもありませんわ」

「イルーシャ様……」

うるうる瞳を潤ませてアイリン姫がわたしを見つめる。

うつ、可愛いなあ。わたしが男だったら、絶対惚れてたね。

それにしても、カデイスは失恋確定だよな。ざまあ、なんて思うほどわたしは鬼ではない。いやちよつとだけ思ったかもしれないけど。

それから、わたしに何度もよろしくお願いしますと言って、アイリン姫は帰っていった。

「うつ、疲れたあー」

誰もいない部屋でわたしは延びをした。

本当、慣れないことはするもんじゃないわ。

ちよつとだらしく長椅子に寝そべりながら、これからのことを考える。

このまま寢室に行つて寝てしまおうか。

「んー、どうしようかなあ……」

でもカデイスに姫の事情を話すつてアイリン姫と約束したんだよなあ。やつに会つのは気が重いけど、うん、やっぱり約束は守らないとね。

「……よしっ」

気合を入れて、長椅子から立ち上がる。

天敵であるカデイスにこれから立ち向かうために。

そんなわけで、わたしは今、王の執務室の前にいる。

ドアの前には私と同じくらいの歳の近衛騎士が立っていた。栗色の髪と青い瞳はどこかで見た色彩だ。

「あれっ、ひよつとしてあなた、リイナさんの」

「はい、息子です。イルーシャ様には、母がお世話になっております」

「いやいや、お世話になつてるのはこっちだから」

近衛に息子がいると聞いてたけど、ダリルさんに似ててかつこい。もうちよつとすると、男前と騒がれそうな容貌だ。

名前はマーティンと言うらしい。歳は私より一つ下の十八歳。マーティン君と呼んだら、君はお止め下さいと嫌がられた。仕方ないので、心の中だけでマー君と呼ぶことにする。

「カデイスに会いたいんだけど」

マー君に取り次いで貰つて、部屋に入った途端、こう言われた。

「またおまえか」

なにおうつ!?

聞こえよがしに溜息までつかれて、臨戦態勢に入りそうになった

わたしは、はた、と思いとどまった。

いけない、いけない。わたしはアイリン姫の結婚話についてカデイスを説得しに来たんだった。

「あの、アイリン姫のことなんだけど」

「……なんだ、会ったのか？」

「うん、さつきね。あの、姫には他に好きな人がいるんだって。でもその人と一緒になるには、もう駆け落ちするしかないって思い詰めてた。だから、姫との結婚を考え直してくれないかな？」

「好きな人がいる、か。それがどうしたというんだ。王族や貴族の結婚は、恋愛感情などとは無縁のものだ。おまえには政略というものがどういうものか分かっていないようだな」

「でも、少なくともカデイスは姫のこと好きだよな？」

わたしがそう言っていると、カデイスは少し不愉快そうに眉を顰めた。

「好きとか嫌いとかでの問題ではない。本当に口の減らない女だな、おまえは」

うわっ、なんか言っちゃいけないことだった？ あんな可愛い姫なら好きにならないわけはないと思って、つい言っちゃったけど。

「……そうだな、どうしても言うなら、考えてやらなくもないぞ」
「え、本当！？」

思わず、わたしは色めきたった。

なんだ、カデイスってば結構話分かるじゃない！

「アイリンが駄目なら、おまえが代わりに王妃になることになるが、それでもいいか？」

「え……？」

思わず頭の中が真っ白になる。

なにを言ってるんだこの男はー！？

「ななな、なに言ってる……っ、わたしが王妃になれるわけないじゃないっ。だ、だって、わたしはひ、人妻ですからー！」

昔の王の妃だったなら、そうだよな？ あ、この場合、正しくは未亡人か。

叫ぶように言ったら、カデイスがくつと笑いだした。

「おまえほど人妻という言葉が似合わない女もいないな。落ち着きが全くない」

そんなことないと言えないのが、ちょっと哀しい。どうせわたしには人妻の色気なんかありませんよ！

「確かに色気はないが……まあ、それは追々どうにかなるだろう」「はあ？」

意味が分からず、思わず首を傾げていると、カデイスに腕を引っ張られた。そのままカデイスの腕の中に閉じこめられると、カデイスは感心したように言った。

「おまえは抱き心地がいいな」

「っ！？」

はいっ！？　ちょっとあなた、どうしちゃったんですか！？

突然の事態に混乱するわたし。

そんなわたしの気持ちもお構いなしに、カデイスの大きな手が背中を滑る。その途端、ぞくりとした感覚が背筋に走った。

思わずびくりと反応してしまったわたしに、カデイスがにやりと笑った。

「なんだ、ここが弱いのか？」

「なに人の背中撫で回してるのよ、このセクハラ大王！　離せえええっ！」

「なにを言ってるのか分からんが、とりあえず嫌がってるのは分かった」

「分かってるのなら、とつとと離しなさいよ！　この馬鹿　っ！」

「何度も俺を馬鹿扱いするのはおまえくらいだな」

滅茶苦茶に暴れるも、カデイスの腕は緩まない。

本当にもう、嫌だああああ！

「カデイス、いい加減にしときなよ。嫌われるよ」

突然声が響いて、空中からキースが現れた。

いや、もう嫌ってたから！

カデイスもそのはずなのに、どうしてこうなったんだ。

……そうか、嫌がらせか。嫌がらせなんだな？

「キース、助けて！」

「はいはい、お姫様」

キースがわたしの手をとって、カデイスの腕から救い出してくれた。

……が。

なぜかキースはそのまま腕を引いて、わたしをぎゅっと抱きしめた。

「ああ、本当に抱き心地いいね」

なに、そのセリフ。

ひょっとして今までのやりとりを黙って見ていたわけ？

「おまえものぞき趣味とは悪趣味だぞ」

「いやあ、おもしろそうだから、ついね」

じゃあなに？ わたしが困ってるのを見て楽しんでたってこと？

わたしをのけ者して話す二人に、わたしはワナワナと震えた。

「二人とも、わたしで遊ぶな　っ！」

そうわたしが叫んだのは言うまでもない。

06 天敵の異変

「それで、結局アイリン姫との結婚は考え直してくれるの？」

かなり軌道から外れたけど、わたしはアイリン姫のことでカデイスに会いに来たんだった。

「だから、おまえが俺のきさ……」

「却下。断固拒否。お断りします」

「……まだ皆まで言ってないぞ」

カデイスがなんかほざいてるけど、やつの言いそうなことは大体分かる。

聞いてしまつて、またからかわれるのはごめんだ。

でもこれって、こっちの一方的な願いなんだよね。結婚の申し込みをなかつたことにしてつて言つて、はい分かりましたつていうわけにはいかないか。なにか取引に使える材料……あ、そうだ。

「そう言えば、わたしのこと観光資源とか言つてたけど、見せ物にでもなるわけ？」

齒に衣着せずに聞いたわたしに、キースが苦笑した。

「まあ、ある意味そうかもね。国民に姫が目覚めたことを知らしめす必要があるから」

「世間一般には、あくまでもイルーシャ姫として振る舞えつてことだよな？ でも、わたし、ここの礼儀作法とか知らないけどどうするの？」

「それについては、君に学んでもらうしかないね」

「……やっぱりそうなるか。」

「下働きとかで雇つてくれても良かったんだけどなあ」

むしろそっちの方がわたしの性にあっている。姫とか、どう考えでも柄じゃない。

「その容姿じゃ無理だろう」

「うん、無理だね。むしろ現場が混乱すると思うからやめてほしい

ね」

容赦なく二人に言われて内心肩を落としながら、わたしは自分の白い手を観察する。

これはどう見ても水仕事なんかしたことありませんって手だよな！。爪まで綺麗に磨かれてるし。

「……分かった、イルーシャ姫として振る舞う。ただし、条件があるんだけど、いいかな？」

「なんだ？」

「アイリン姫の輿入れの件は白紙に戻すこと。代わりにわたしが王妃に、とかふざけたこと言わないこと」

「そんなのでいいの？ 欲がないなあ」

驚いたようにキースがわたしを見る。

いや、ここ大事なことだから！ 無理矢理王妃にされたらたまったものじゃない。

それに、アイリン姫にカデイスを説得するって約束したしね。

「ふん、俺もアイリンに駆け落ちされてしまったら醜聞になるしな。仕方ない、承諾しよう」

……やった！

どこまでも偉そうにカデイスが言うのも、この時ばかりは気にならなかった。

浮かれたわたしは、ついカデイスの手を取ってぶんぶん振ってしまっつ。

「良かったあー。カデイス、ありがとう！」

「あ、ああ……」

なんかカデイスが引いてる気もするけど、まあ気にすることもないか。

アイリン姫、喜ぶだろうなあ。

良かったね、姫。

わたしはにこにこしながら、また伺いますと言っていたアイリン姫の愛らしい顔を思い浮かべる。

「なんと言つか、君って最強だよね」

溜息とともにキースに言われたけど、どういう意味だったんだろう、謎だ。

わたしは一仕事終えた気がして、上機嫌でお風呂に入っていた。もう侍女さん達にお風呂に入れてもらうのも恥ずかしくないよ。慣れって怖いね！

「イルーシャ様、なにか良いことでもあられたのですか？」

シェリーとユーニスにそう尋ねられたので、アイリン姫のことを二人に話した。

「まあ、それは良いことをなされましたわ、イルーシャ様！」

「アイリン様もきつとお喜びになられるでしょうね」

二人が褒めてくれるのをわたしはにこにこにやにやの中間くらいの顔で笑って受け止めた。

お風呂に入っている間にシェリーに渡された冷たいお茶を口に含むと、火照った体が少し静まるような気がした。うーん、至れり尽くせりだなあ。

「でも、そうしますと、陛下のお相手がまたいない状態になってしまいますわね」

「あら、シェリー、イルーシャ様がいらっしゃるじゃない」

ユーニスのその言葉に思わず噴き出しそうになって、わたしは慌てて口に含んだお茶を飲み込んだ。

「いや、それはないから！」

「でも、イルーシャ様が一番の有力候補なんですのよ。なんといつても、伝説の姫君なんですもの！」

うつとりと胸の前で指を組み合わせて、ユーニスが言う。

「あら、でも伝説には必ず王族の方と結ばれるとはありませんわよ」
「え、そうなの？」

てつきり王か王子と結婚しなければならぬと書いてあるものだ
と思つてたけど、そうじゃないらしい。

わたしが聞き返すと、シェリーは神妙に頷いた。

「そうですね。ですからイルーシャ様がどなたを選ぶのかはご自由
なのです。わたしのお薦めはキース様なんですけど」

「……はい？」

なんでここでキースの名前が？

「当代一の魔術師で、現国王の従兄弟。身分に不足があるとは思え
ませんし、イルーシャ様ととてもお似合いですわ！」

夢見る乙女の表情でシェリーが力説する。

キースつて国王にタメ口だから偉いんだろうなと思つてたら、従
兄弟だったのか。なんか納得。

「あら、でしたら陛下も負けてませんわよ。陛下は剣を取らせたら
誰にも負けませんもの！」

負けじとユーニスが拳を握つて叫ぶ。

二人の意見が白熱するのをわたしはただ呆然と聞いていたけど、
だんだん限界が近づいてきた。

「……とりあえず、もう上がつていいかな？ いい加減のぼせそう」

百合の花と白い菊の花が見える。

聞こえてきたのは、幼い頃からよく知っている近所の人の声。

「原田さんのところの由希ちゃん、まだ二十歳前だつていうのに、
かわいそうにねえ」

「残された家族も気の毒よねえ」

なにを言つてるの？

それじゃまるで、わたしが死んだみたいじゃない。

高いところから落ちるような感じがして、びくりとして目を覚ますと、また昨日と同じ夜明け前だった。

なんだか連続して嫌な夢見たなあ。

夢の中でわたしが死んでるとか、冗談にしても笑えないよね。

豪華なベッドの中で溜息をついて、わたしは寝返りを一つ打つ。わたしが穴を開けたバイトとか、どうなってるんだろう。行けなくなった連絡はお母さんがしてくれるだろうけど。

なんだか泣きたくなってきた、わたしはシーツを引き被る。そして、少しだけ泣いた。

「おはようございます、イルーシャ様」

着替えと朝食を終えたわたしを待ち受けていたのは王室お抱えの教師達だった。

早速今日からか。カデイス、仕事早すぎるぞ！ 今日くらいはゆつくりしていたかったのに。

とりあえずわたしが学ぶのは、礼儀作法と語学と、歴史。これだけでも、わたしにはいっぱいいいっぱいだ。

けど、中学や高校でもこんなに勉強したことはないほど、わたしは頑張った。

「イルーシャ様、大丈夫でございますか？ あまり根を詰めないでくださいましね」

口調は丁寧だけど厳しい先生にしごかれ、午後の休憩時間にはすつかりぐつたりしていたわたしをリイナさんがいたわってくれた。

「ありがとうございます」

なんというかリイナさんは、母親を連想させる。

といっても、うちのお母さんは放任だったから、リイナさんはわ

たしの理想の母親像に近いのかもしれない。

そんなことを考えながら、リイナさんが入れてくれたお茶を飲んで一休みする。

ああ、コーヒー飲みたいなあ。

紅茶も悪くないけど、コーヒーのが好きなのよ。でもなければしょうがない。

「なんだ、一目で既にへばっているのか」

そう言っただけでかかと部屋に入ってきたのはカデイス。

一応女の部屋なんだから、少しは遠慮しろ。

「ちよつと、ノックくらいしなさいよ」

「リイナには断ったぞ」

部屋の主に断れよ！

思わず顔がひきつりそうになる。

そのリイナさんはカデイスのお茶の用意に行ってしまったらしく、ここにはいない。

「わざわざわたしの部屋に来るなんて、カデイスって暇なの？」

「暇ではないが、おまえがきちんと学んでいるか確認する必要があるからな」

思わず喧嘩腰になってしまったわたしの言葉に顔をしかめながらもカデイスが答える。

「そんなことしなくてもちゃんとやるよ、約束だし」

「そうか。是非ともこれからもうあつてほしいものだな」

くうつ、なんて嫌味なやつだ！

せつかくの休憩なのに、よけい疲れた気がする。

ちよつとぐつたりしていると、お茶の支度をして戻ってきたリイナさんが戻ってきた。

「まあ、イルーシヤ様、陛下とすっかり仲良くなられたんですね。さすがイルーシヤ様ですわ！」

なにがさすがなのか分からないけど、激しく勘違いされていると思うのは、わたしの気のせいだろうか。

「ああ、仲良くなったぞ。ほら、この通りだ」

そう言つと、カデイスはわたしの隣に座つて、わたしの肩を抱き寄せた。

「まあっ、そこまで仲良くおなりになつて。素晴らしいですわ!」

こいつ、後で絶対殴つてやる。

わたしはテーブルの下で拳を固めた。

「それでは、わたくしは下がらせていただきますね。どうぞ、ごゆるりとしてくださいませ」

ちよっ、リイナさん、変な気を回さないで!

リイナさんがこの場を去ったことで、わたしはカデイスと二人きりになる。

早速拳を振りあげてやったけど、残念ながらカデイスにあっさりかわされた。ちえっ。

「凶暴な女だな、おまえは。姫君は拳で殴りかからないぞ。姫として振る舞うと自分で言ったのをもう忘れたのか」

……うっ。

カデイスの言葉に思わずつまつてしまつたわたしだったけど、……いやいやいや。

「そっちが嫌がらせするからでしょ。わたしを嫌うのは分かるけど、いい加減にしてよね」

わたしがそう言つと、カデイスはなぜか瞳を見開いた。

なに、その驚いたような顔は。

「……別に嫌つてはいない」

「嘘でしょ」

「なぜ速攻で返すんだ。……別に嘘はついていないし、その必要もない」

「でも、嫌がらせしてるじゃない。いちいち嫌味言ってくるし」

嫌味に関しては、まあ、わたしの方も酷いけどね。

そう言つと、カデイスはくしゃりと前髪を掻きあげ、溜息をつい

た。

「それは、なんだその、おまえの反応がおもしろいからだ」

おもしろいつて、なんだ！

勢いよく長椅子から立ち上がりかけたわたしだけど、手をカデイスに引かれ、あっと思ったときには彼の胸に転がりこんでしまっていた。

「ちよつと……っ」

カデイスの膝の上に座る形になってしまったわたしの背に彼の手が回される。

ちよつと、どうなってるの、これーっ！？

背中に回されたカデイスの手に力がこもり、わたしは息を止めてカデイスを見つめてしまった。

「どうしてだろうな、伝説の姫君など面倒な存在だと思っていたというのに」

そう言うカデイスの藍色の瞳が揺れる。

な、なんかおかしいことになってる気がする。

リイナさん、お願い今すぐ帰ってきて！

わたしの願いもむなく、カデイスの手がわたしの顎をそつと持ち上げた。

こ、これはひよつとして。

や、やだ……！

カデイスの顔が近づいてきて、わたしは思わずギュッと目を瞑った。

頬に柔らかな感触があたって目を開く。

ひよつとして今の感触は……キス？

突然のことに呆然としてみると、なぜかカデイスは苦しそうな顔をした。

「そんなに俺を怖がるな」

「む、無理だよ、なんでいきなりこんなこと……」

するの、と言おうとしたその時、ドアをノックされる音が響いた。

リイナさん帰ってきてくれたの!?

「はいはいはいっ!」

カデイスの腕が緩み、天の助けとばかりに元気よく返事してわたしは立ち上がった。

部屋に入ってきたのはリイナさんじゃなくてキースだったけど、まさに天の助けとはこのことだ、キースありがとう!!

「なぜおまえはこの頃合いになって来るんだ」

カデイスが唸るように言うと、キースが眉を上げた。

「君がなにを言いたいのかわからないんだけど。カデイス、僕はそろそろ仕事してほしいと言いに来ただけだよ。報告書がたまって後で苦労したいなら退散するけど」

その言葉で観念したらしいカデイスは、溜息を一つつくと立ち上がり、わたしの方を向く。

「また来る。覚悟しておけ」

か、覚悟ってなんですか!?! とつても知りたくないんですけど
ーっ!

混乱するわたしに、事態を察したらしいキースが声をかけてきた。

「……大丈夫?」

ごめん、たぶん大丈夫じゃないです。

07 望郷と喪失

それから後の授業は、散々だった。

カデイスが残っていた言葉が気になってつい上の空になってしまつて、先生にしかられるし。

ひよつとして、あれはわたしをからかっただけだったりして。

……そうだとしたらカデイスめ、どうしてくれる。せつかくまじめに勉強しようとしてるのに。

ぐたつとして長椅子に寄りかかっていると、リイナさんがキースからの伝言を伝えてきた。

今日の夕食をカデイスとキースで一緒にどうかとお誘い。

体は鉛のように重くて正直疲れていたけど、わたしはキースの誘いを受けることにした。

この間の晩餐会は途中で退席しちゃったし、わたしも彼らに確認したいことは山ほどあるしね。

というわけで、わたしは今ガルディア国王カデイス・ディーン・ディレグ・ガルディア陛下と、同じくガルディア国魔術師団長キース・ルグラン・レグ・アレグリアとの晩餐会に参加中だ。

キースは前国王の弟であるアレグリア公爵の嫡男なんだって。

ちなみに魔術師としては、百年に一人出るか出ないかの逸材だとか。どんだけ天は人に二物も三物も与えるんだ。

「すごいなあ。わたしも魔法とか使ってみたいな」

「よかつたら教えようか。魔力はありそうだし、簡単なものなら使えるんじゃないかな」

「本当！？　じゃ、教えて」

「うん、いいよ」

やったあ。言ってみるもんだね。

「おい」

キースに約束を取り付けてにこにこしてると、不機嫌そうな声が前の席から響いた。

「さっきから、なぜキースの方ばかりみて話すんだ、おまえは」

「え、ええ……？ な、なぜかな？」

カデイスに声をかけられて、つい挙動不審になるわたし。

ついさっきのことで、非常に気まずいんだけど。

「いきなりせまられば、それは避けられても仕方ないと思うよ」
ひいつ、キースってばそんな核心を突くようなことをつ。

なんでカデイスがあんなことしたのか聞きたいけど、なぜだか聞いたら後悔しそうな気がするんだよね。

うつ、おかげでせつかくの食事の味がよく分からなくてもつたいない。

「口づけたかったんだから、しょうがないだろう」

「な……っ」

カデイスの爆弾発言に、わたしは思わず持っていたナイフとフォークを皿に落としてしまった。

「なんつてこと、あつさり言うのよーっ！」

「本当だね、我慢というものを知らないことを公言するなんて獣と一緒にだね。危ないから近くに寄らない方がいいよ」

「正直に話したただけだろう。むしろキース、おまえのような腹に一物ありげなのが一番たちが悪いんじゃないか？」

「……君は僕に喧嘩を売っているのかな？」

うわあ、なんだか剣呑な雰囲気だ！

わたしは慌てて話題を変えることにした。

「ねえ、昼間先生に教わったんだけど、ここって結構大きな国なんだよね？」

「ああ、この大陸では一番大きいぞ」

「ここの気候ってどんな感じなの？ 今は春みたいだけど」

「この国の気候は一年中こんな感じだよ。他の国に行くところはいかないみたいだね。暑かったり寒かったり色々だよ」

「……一年中春……。私の頭に某漫画が浮かんだ。」

「じゃあ、常春の国ってこと？」

「常春の国か、いい表現だね」

「思っていたが、おまえ、割りに学があるな」

「……元ネタがギャグ漫画だということは言わないでおこうとわたしは心に決めた。」

「……日本には九年間の義務教育があるから。わたしはそれから三年間高校に通ったけど」

それで結局フリーターやってたんだけどね。学校の勉強が役に立ったと思ったことってあんまりないなあ。

「九年の教育が義務なんだ。すごいね」

「え、そうなの？」

当たり前すぎて、そのすごさがいまいち分からない。

「ああ、すごいぞ。この国も三年の教育を推奨してはいるが。それも義務ではないしな」

「へえ……。実は日本ってすごかったんだねえ。そういえば、日本語の識字率はほぼ百パーセント……。ほぼ完璧らしいよ」

「それは民間人も含めて？ ニホンって国はどのくらいの人口なの？」

「日本人全般だよ。人口は一億二千万人超えてる」

わたしがそう言うと、二人は絶句した。

「……一応確認するけど、桁を間違えてるわけじゃないよね？」

「間違えてないよ。一億二千万人で合ってる」

「おまえがいた国は島国と言っていたが、実は大陸の間違いじゃないのか？」

「うつん、島国で合ってるよ。南北に細長くて国土は狭い、……。ああ、地震大国でもあるかな」

「……地震とはなんだ？」

見るとカデイスが不思議そうな顔をしている。

「あれ、地震知らない？ 地面が揺れるの」

「……よくそんなところで生活してられるな。落ち着かないだろう？」

「多少の揺れくらいなら平気だよ。みんな慣れたものだよ。だってそれが日常だもの」

「……聞けば聞くほど、二ホンって訳が分からない国だね」

キースが感嘆したような溜息をつく。

「そんなに驚かれるようなことかなあ。わたしにとっては、四季がない方が驚きなんだけど」

春は満開の桜。夏は雨に濡れる紫陽花。暑い日差し、空に浮かぶ入道雲。秋には紅葉。冬はいちめんの雪景色。

ああ、なんて綺麗な光景なんだろう。

こうやって思い出してみると、日本って捨てたもんじゃないよね。

その後もわたしは二人の質問を受けて、時々しどろもどろになりながら受け答えをした。

「……うあー、疲れたあー」

……このセリフ、昨日も言ってたような気がするな。

お風呂に入って寝間着に着替えたわたしはふかふかのベッドに沈んだ。

「わたしに専門的なこと聞かれても、分かるわけじゃない……」
まさかの質問責めにたじたじになりながら晚餐会を退散したわたしは、溜息をつくしかなかった。

質問してくる二人は完全に施政者の目だったよ。……お願いだか

ら、一般庶民に多くを求めないでほしい。

ああ、でもわたしって日本で結構恵まれた生活してたんだな。…

…こんなふうに失ってから分かることってあるんだね。

ふいに涙腺が崩壊しかけて、わたしは無理矢理目を擦る。

もう寝よう。そうしよう。

疲れた体を休めるために、わたしは眠る。……それで真実を知ってしまうことになるかも知らずに。

目に入ってきたのは、いちめんの白い菊と百合の花。
泣いているお父さんとお母さん。

うちは共働きだったから、あまり構ってもらった記憶はない。だから放任だとばかり思ってた。
けれど。

祭壇の前には、棺。

その中に誰かの遺体が安置されている。
綺麗に化粧された青白い顔。

棺に入れられているのは……わたし？

「それではお別れです」

無情に響く葬儀を取り仕切る人の声。

わたしを入れた棺は狭くて暗い穴の中に入っていく。

なにをするの、やめて。

わたしは生きてる。ここに、今ここにいるのに。

お願い、待って。

だって、わたしはまだ。

その願いも届かずに、わたしの体は炎に包まれる。
燃えてしまう。

わたしのからだ、わたしの体が。

無くなってしまう！

「やだあぁっ！！」

感じるはずのない熱さを感じた気がして、思わずわたしは飛び起きた。

視野に入ってきたのは、未だ慣れない豪華な内装。

「あ……」

……嫌な夢。

よりによって、あんな。

ぱたぱたと手元のシートに水滴が落ちる。

薄暗い部屋の中、わたしは流れる涙を拭うこともできずに、ただただ泣き続けていた。

「イルーシャ様……」

翌朝、わたしの顔を見たリイナさんは驚いたように瞳を見開いた後、冷たいタオルを持ってきてくれた。

「イルーシャ様、いったいなにがあったんですの？」

冷たいタオルをわたしの目に当てながら、心配そうにリイナさん

が聞いてくる。……よつぽど酷い顔してたんだろうな。

「なんでもないんです。……ただ、少し思い出してしまっただけで」

「まあ……イルーシャ様、いろいろとお疲れなんですわ。今日はお勉強を取りやめるように陛下に申し上げてきますわ」

「……ごめんなさい。お願いします」

自分でもかなり打ちのめされているが分かってたから、リイナさんの申し出は正直とてもありがたかった。

その後、リイナさんはわたしを薔薇の花びらを浮かべたお風呂に入れて、明るい色のドレスを選んで着替えさせてくれた。

「今日一日、ゆっくりされたらいいと思いますわ。……ああ、そうですね、庭園をご覧になると良いかと。こちらの庭園は花がとても綺麗ですの。イルーシャ様もきつと楽しめますわ」

わたしはリイナさんの提案に従って、軽く朝食をとった後、庭園を散策することにした。

「それでは、わたくしはこちらに控えておりますので。ごゆっくりどうぞ」

リイナさんのありがたい申し出に頷きながら、わたしはリイナさんを庭園のテーブルに残してゆっくりと歩きだした。

「本当に綺麗……」

きちんと管理されている庭園は、色とりどりの花に彩られていて、わたしは思わず感嘆の溜息をつく。

「ここは管理が行き届いてるからな」

聞き覚えのある声がして振り向くと、そこにはなぜかカデイスが立っていた。

「どうして、ここに」

「リイナに言われた。おまえが沈んでいるようだから、慰めてこいと」

リイナさん……、もしかして仲良くなったというカデイスの言葉を本気にしてる？

「……昨日あの後、泣いていたのか？」

「泣いてないよ」

「昨日俺達が二ホンのことをあれこれ聞いたから、おまえは故郷を思い出したんだろう？」

今はそのことに触れてほしくなかったのに。

わたしはカデイスから顔を背けると、また溢れてきそうな涙を堪えた。

「ユーキ」

カデイスがわたしのことを名前で呼んだのは初めてじゃないだろうか。

……でもやっぱりユーキになるんだね。

もう、わたしの名前を正しく呼んでくれる人はいないのかも。

手を引かれて無理矢理カデイスへと向かされたわたしは、みつともない泣き顔を晒してしまった。

「ユーキ、泣くな」

カデイスは苦しげに顔を歪めると、私を抱きしめた。

「……無理だよ」

「ユーキ」

「そんな呼び方しないで。わたしはユーキじゃない。由希、原田由希だよ。ちゃんと呼んでよ」

「……すまない、俺にはユーキが言うようには呼べない」

わたしの無理な要求に、カデイスが謝った。あの俺様なカデイスが。

わたしはカデイスに抱きしめられたまま、ぼうつと思う。

「おまえが一人で知らない場所に放り出されて不安だろうと言うことに気がつけないで悪かった。今もさぞ、心細いだろう。……それでも、俺はおまえがここに来てくれたことを良かったと思っている」
……今、カデイスはなんて言っただろう。

わたしがここに来てくれて良かった？

わたしはカデイスの胸に腕を突っぱねて、カデイスから距離を取る。

「いくらなんでもそれは酷いよ、わたしは元の世界に帰りたいのに」
「ユーキ、おまえを傷つけるつもりで言ったのではない。……俺は、おまえが好きなんだ」

「嘘」

「嘘じゃない」

「……嘘だよ。好きなら、なんでこんな酷いこと言うの」
あまりのことに涙がこぼれる。

ひどい、酷いよ、カデイスは酷い。

「……確かに、俺は酷いな。だが、おまえが傷つくと分かっている、おまえを帰したくはないのだ」

「それは、わたしに利用価値があるからでしょ。だから、そんな言葉で誤魔化そうとしてるんだ」

「ユーキ、それは違う」

延びてくるカデイスの腕をわたしは避ける。

「なにが違うの、傷つくのが分かかって言うなんて……」

泣きながら、わたしはじりじりと後ろに下がる。

今はカデイスの顔を見たくなかった。

だから言ってしまった。ただの八つ当たりだと分かっているながら。

「カデイスなんて、大っ嫌いっ！」

わたしは身を翻すと、カデイスから少しでも遠ざかるために走り出した。

08 決意

どのくらい走っただろう。

気がついた時には、わたしは広い庭園の中で迷子になっていた。

……わたし、なにをやってるんだろう。

きっとリイナさん、わたしを探してる。戻らなきゃ。

自分で自分が情けなくなりながら、手の甲で涙を拭う。

「おや姫君、こんなところでどうされたんですか？」

ふいに声をかけられて、見るとそこにはダークブロンドの髪と、金の瞳の男の人が立っていた。

誰だろう？

なんとなく、キースと似通った雰囲気を持っている。……魔術師団の人だろうか？

「あ、あの迷子なんです……」

いい歳してちょっと恥ずかしかったけど、私は正直に告白した。

「伝説の姫君が迷子ですか」

目の前の人は、おかしそくに笑いをこらえている。

「わたしのこと、知ってるんですか？」

「知ってるいるものにも、巷では噂で持ちきりですよ、伝説の姫君が目覚めたと。……今実際に会って、すぐにあなたのことだと分かりました」

「……そんなに噂になってるんですか」

そういえば、アイリン姫もわたしの噂を聞いて訪ねてきたんだっけ。

「ええ、まあ。例えば、儂げな絶世の美貌であるとか。姫君は口が悪く、王を『馬鹿』と罵ったとかですね」

「ええ……っ!？」

まさかの言葉に、思わずわたしは赤くなる。

カデイスを馬鹿って言ったこと、そんなに広まってるの？ これ

じゃ、姫君らしく振る舞うなんて無理じゃない？

「それ、そんなに噂になってるんですか？」

恐る恐る聞くと、その人は平然と頷いてくれた。

「ええ、結構有名ですよ。なんでもその時の叫びを聞いた騎士や侍女がいたそうで」

……うあああつ、なんてこと！

わたしは頭を掻き毟ってこの場を転がり回りたい衝動に駆られたけど、人前でそんなことができるわけない。

「そ、そうなんですか」

なんとか平静を装いながら、わたしはひきつった笑みを浮かべた。

「ああ、あとこれは秘密なんですが、姫君の中身は異世界人であるとか」

「……え……っ」

さすがにこれは、あの時の晩餐会にいた人物しか知らないはずだ。

……それなのに、なんでこの人は知ってるの？

思わず目の前の人の顔を見返すと、その人はにやりと笑った。

善良そうな顔の裏に凶悪なものを見た気がした。

「……あなた、誰？」

この人は危険だ。

そう感じて、わたしは後ずさる。

「わたしの名は、ウィルロー。姫君、以後お見知りおきを」

ウィルローと名乗ったその人は、騎士の礼をとってわたしの手に恭しく口づける。逃げ出したいのに、なぜかわたしは動けなかった。

「……ああ、せっかく姫君と語らっていたのに無粋な邪魔が入ったようだ。それではまたお会いしましょう、イルーシャ姫」

そう言ってウィルローはわたしの目の前から姿を消した。

やっぱり魔術師だったんだ。けど、あの悪意のある笑いは、いつたいに。

「……ユーキ？」

ふいに声がして顔を上げてみると、目の前にキースが立っていた。
「キース、なんでここにいるの？」

あまりにもキースがタイミング良すぎる現れ方をしたので、つい聞いてしまう。

「カデイスやリイナが君のこと探してたからね。僕は君の魔力を追ってここに来た」

「え、じゃ、キースにはわたしがどこにいるか分かるってこと？」

「必要がなければ使わないけどね。だって嫌だろう？　いつでも、どこにいるか把握されるなんて」

そう言つと、キースは自嘲するように笑った。

魔術師としては超一流だけど、キースはキースで、結構そのことで苦労してるんだろうか。

「……そうなんだ。ごめんね、探させちゃって」

「気にしないでいいから。……それはそうと、今ここに誰かいなかった？」

「あ、うん、いたよ。ウイルローって人」

「……ウイルロー……」

途端に厳しい顔になったキースに、わたしはちよつと驚いた。

「……キース、その人がどうかしたの？」

なんとなく不安になって尋ねると、キースはわたしの肩を掴んだ。

「ユーキ、ウイルローとなにを話した？」

「え……、わたしの噂のこと話したよ。あの人、なぜかわたしが異世界人だつてこと知ってたけど、なんでなの？」

「……そう、ウイルローが……」

キースが厳しい顔のまま呟くのわたしは息をのんで見ていた。
そんなわたしに気づいたキースは、厳しい表情を崩してちよつと笑った。

「……ああ、ごめんね。なんでもないんだ」

……なんでもないって感じじゃなかったけどな。

釈然としない思いでキースを見たけど、もう彼はそのことに触れる気はないようだ。

「君がこんなところにいるってことは、どうせカデイスが君になにか言っただろう？　なんなら、まだここにいればいいよ。反省させるためにも、もう少し君を探させるっていうのも悪くないかもね」
少しおどけたようにキースが笑って言う。わたしもそれにつられて笑った。

ちょうどその時、庭園に柔らかな風が吹いてきて、ささくれ立っていたわたしの心も風いでいく。

ああ、綺麗だな。

揺れる花々を眺めながら、わたしは口を開いた。

「……ねえ、キース」

「うん？」

「変なこと聞くけど、この国の埋葬方法ってなにかな？　土葬？」

この聞き方は、やっぱり唐突だったかな。

キースは不思議そうに首を傾げたけど、律儀に答えてくれた。

「一般的にはそうだね。貴族や王族なんかだと、防腐魔法をかけたりするけど」

「そうなんだ。日本では火葬なんだよね。……だからわたしの元の体、たぶんもう無い」

キースがわたしの言葉に絶句する。

わたしは彼の視線を避けるように横を向いた。

「なんとなくだけど、分かつちゃったんだ。わたし、元の世界ではもう死んでるの。だから、もう元の体には戻れない」

「それは……」

「元の体に戻るか調べてくれるって言ったでしょ？　でも、もう必要ないから調べなくても、いい……よ」

なるべく明るく言おうとしたのに、また泣きなくなってきた。

泣き顔なんか見せたら駄目なのに、わたしの意に反して涙は頬を転がっていく。

「ユーキ」

キースがわたしを見て眉を寄せる。

ほら、キースが困ってる。こんなふうに泣いちゃ駄目じゃない。

「ごめ……、わたし……っ」

いたたまれなくて謝った次の瞬間、わたしはキースに痛いほど抱きしめられていた。

「キー……」

突然のことに驚いて、わたしはキースの名前を呼ぼうとしたけれど。

開きかけた唇をキースの唇に塞がれた。

「……なんで……？」

今されたことが信じられなくて呆然として聞くと、キースはなにかを堪えるように顔をしかめた。

キースは、こんな顔をする人だったろうか。いつも飄々として掴み所のない人だと思ってたのに。

「……もう駄目だ。君はカデイスのものになるかもしれないのに、僕はもう自分の気持ちを偽れない」

わたしがカデイスのものになるかもしれないって、なんのこと？ 混乱するわたしを抱くキースの腕に力がこもる。

「僕は、君が好きだ」

そう言った後にまたキースの唇が落とされる。

「え、あの、あの……っ」

ただ狼狽えるだけのわたしの唇に何度もキースが口づける。

キースがわたしを好き？ どうして？

「キー……、や……、ま……っ、て……っ」

口を開こうとする度に唇を塞がれて、息苦しさに目眩がしそうになる。

抵抗することもできずにくたりと力を失ったわたしの背をキース

の腕が受け止める。

キースは苦しい顔を見ると、わたしを強く抱きしめた。

「ユーキ、このまま君を」

「なにをやっている！」

怒声が聞こえてきたと思ったら、次にはキースはカデイスに殴り倒されていた。

ふらりとその場に倒れそうになったわたしをリイナさんが支えてくれる。

キースは切れた口の端を拭くと、ゆっくりと立ち上がった。

「我慢できないのは獣だと言ったのは、おまえではなかったのか」

キースはカデイスのその言葉に答えずに、わたしの方を向く。途端にびくりと体が震えた。キースが今までと違う人みたいに見えて怖かった。

キースはわたしの方に手を広げてなにかを唱える。すると、周囲の景色が一変した。

「どうやら、移動魔法を使われたみたいですね」

わたしにくっついていたリイナさんも、一緒に部屋に送られたらしい。

「それにしても、キース様には驚きましたわ。あのように我を忘れてしまわれるなんて。難攻不落と言われたキース様を陥落されるなんて、さすがイルーシャ様ですわ」

……リイナさん、その「さすがイルーシャ様ですわ」って口癖になってない？

「そ、そんなこと……。わたし全然お姫様らしくないし、キースがわたしを好きっていうのになにかの間違いです。わたし、口が悪くて、がさつですし」

「……知ってますわ」

ちよつとうつろたえながらそう言うと、リイナさんはいたずらっぽく微笑んだ。

「口が悪くても、がさつでも、イルーシャ様はイルーシャ様ですわ。陛下や、キース様が惹かれたのもそんなイルーシャ様ですもの。イルーシャ様は、今のご自分にもっと自信を持つべきですわ」

「そ、そうかな……」

二人に好かれてると言うのは、ちよつと自信がない。この容姿だから好きだつてことも充分考えられるし。

「そうですね。飾らない今のイルーシャ様はとても魅力的です」

「そ、そんなに褒められると、ちよつと照れるんですけど……」

思わず赤くなつた頬を両手で隠す。リイナさんは、そんなわたしにふふ、と笑う。

「ほら、イルーシャ様はとても可愛らしいですわ」

リ、リイナさん……、もう勘弁してください。恥ずかしいです……。

褒められ慣れてないわたしには、既に許容量を越えている。

「それでは、わたくしお茶を淹れてきますね。イルーシャ様も二人の男性に告白されているいろいろお疲れでしょう。今度こそ、ごゆっくりしていただかないと」

リ、リイナさん、ひよつとして両方とも見てたの？

内心冷や汗をかく思いで聞くと、リイナさんはにこやかに笑つた。「ええ、もちろんですわ。こんな素晴らしいものを見逃す手はありませんもの」

こ、これは、恥ずかしすぎる。

よろよると、定位置の長椅子に腰をかけるとわたしは肘掛けにくつたりともたれ掛かった。

いや、とにかくいろいろありすぎた一日だった。

帰れなくなつてしまったのを哀しんでたはずなのに、それもそれほど哀しくなくなってきた。

……いや、まだちよつと心が痛いけどね。

でも、どんなに泣いても、わたしはここで生きていくしかないん

だ。だったら、とことん、イルーシャとして生きてやる。

イルーシャ様は、イルーシャ様ですわ。

さつきリイナさんが言った言葉を思い返す。

……うん、そうだね。イルーシャになっても、わたしはわたし。ただ、姿が原田由希からイルーシャに変わったただけだ。

「イルーシャ様、落ち着かれたようで、よかったですわ」

お茶を出してくれながら、リイナさんが微笑んだ。

「うん、わたし、決めたの。自分らしく生きることにするって。リイナさんのおかげだよ、ありがとう」

おいしいお茶を飲んで、わたしはにっこり笑った。

明日、カデイスとキースにわたしの決意を報告することにしよう。

……二人からの告白は、正直どうしていいか分からないけど、それはとりあえず、保留と言うことにしておこう。……うん、そうしよう。

09 新しい世界

決意はしたものの、やっぱり二人に面と向かって言うのは恥ずかしい。

わたしはぐるぐると巡る思いと戦いながら、花々が咲き乱れる庭園をやっぱりぐるぐると歩いてた。

「……なにをやってるんだおまえは。変なやつだな」

問題の一人が現れたのに驚いて、わたしは飛び上がってしまった。
「カ、カデイス、なんで……？」

「窓からおまえがここにるのが見えたから来てみただけだ。さっきのおまえの行動は端から見たら奇行にしか見えんぞ」
「う」

まったくその通りなので、わたしはなにも言い返せない。

「……なにか悩んでるのか？ 俺とキースのせいかな」

「うわああ、カデイスの馬鹿、どうしてくれるの、思い出しちゃうじゃないよ！」

カデイスに抱きしめられて告白されたことか、キースにキスされて告白されたことか。

真っ赤になった頬を隠すように覆い、その場を駆け出そうとして、わたしははた、と気がついた。

いや、ここで逃げたら駄目なんだ。

「そういえば、わたしカデイスに言っただけだったことあるんだ」

「なんだ、昨日の大嫌いという言葉のことについてか」

「……ああ、そう言えばそんなこと言っただけ」

「おまえ……」

わたしのその言葉にカデイスの頬が引きつった。いや、すっかり忘れてたよ、ごめん。

「大嫌だって言ったのは、八つ当たりだった。ごめん、謝る」

「……八つ当たり？」

「カデイス、あの時わたしがここに来てくれて良かったって言ったじゃない。わたしは元の世界にはどうやっても帰れないのが分かってたから、頭に来てつい言っちゃったんだよ」

「……帰れないのが分かってたとはどういうことだ」

カデイスが不審そうに眉を寄せた。……そういえば、キースには言っただけ、カデイスは知らないんだっけ。

「ああ、元の世界ではわたし、もう死んでるから」

「な……」

カデイスが瞳を見開いて、言葉に詰まる。

「なぜ、それを早く言わない。分かっていたら、あんなことは……」
狼狽するカデイスにわたしはちよつと笑った。

「分かったのはつい昨日のことだったから……。夢で見たの、わたしの遺体が焼かれるところ。それでわたしがもう死んでるって確信したの」

「だが、夢で見ただけなら、元の体がなくなっているとは限らないだろう」

「……ううん、それはないよ。うまく言えないけど、わたしには分かるんだ」

そう言っただけで胸元に手を当てる。

あの時の喪失感を説明するのはたぶん難しいと思う。

今でも泣きたくなくなるような虚脱感と絶望感は忘れられない。

「だからね、たぶん、わたしこのままずっとイルーシャのままなんだ。わたしの元の体はもうないから」

「ユーキ」

カデイスの腕が私に延びようとしたその時、目の間にキースが現れた。

本当にいつも唐突だね、キース。それで助けられていることも何度もあるけど。

「キース、おまえ……」

「ユーキが心配なのは、カデイス、君だけじゃないんだよ。僕もだ」

まだ二人とも冷戦中なのかな。

わたしの元の体のことも話してなかったようだし。

……あ、そうだ。

二人の顔を見て、わたしは当初の決意を思い出した。

「わたし、二人に聞いてもらいたいことがあるんだけど」

「なんだ」「なに？」

ほとんど同時に返事が返ってくる。

うん、大丈夫、ちゃんと言える。

私は深呼吸を一つして、覚悟を決めた。

「あのね、わたし決めたんだ。これからは原田由希じゃなくて、イルーシャとして生きるって」

「」

二人がなにかを言いかけて沈黙する。

「どうせ、元の体には戻れないし、だったらこのままイルーシャとして過ごすのも悪くないかなと思って」

なんと返答しようか考えあぐねているらしい二人から視線を逸らすようにして、私は横を向く。

「……わたし、元の世界にいたときね」

まずい、また泣きたくなってきた。

わたしは溢れてきた涙をこぼさないように顔を上げた。

「本当に適当に生きてたの。適当に高校卒業して、適当にバイトして、適当に友達づきあいして。これからも、そんなふうにして無難に生きていくんだろうなとか漠然と思ってた」

こう言くと、本当につまんない人生だな。なんかもっとやりようがあったらうに。

「でも、そんな生き方しかしてこなかったこと、自分が死んでるって分かってから、すぐ後悔した。今までのわたしが生きてきた意味ってなんだったんだろうって思ったの」

それに、泣いてたお父さんとお母さん。

結局、なにも親孝行できずに死んじゃったな。

そういえば、二人共わたしの小さい時の写真をケータイの待ち受けにしていたっけ。

愛されていることにも気づかずにいたなんて、本当にわたしは親不孝だ。

死んじゃった今でも、二人の待ち受けにわたしが表示されているのかな。……だったらいいな。

なにも残せなかった。

それが、今とても哀しい。

もし、なにかに打ち込んでたら。

もし、親友がいたら。

もし、両親の愛情に気づいていたら。

今のこの空虚な気持ちもなにか違っていただろうか。

「わたしがこの世界に来たのはなにか意味があるのかもしれないし、もしかしたらないのかもしれない。でも、今度はイルーシャとしてちゃんと生きるよ。今度は後悔しないように」

この体になってから、まだいろいろなことに慣れなくて大変だけど、少なくとも適当なだけの人生になるようなことはないだろうな。そう考えると、お姫様として生活するのも悪くない気がしてきた。

「……あのね、わたしのこと今度からユーキじゃなくてイルーシャって呼んで」

「……おまえは、それでいいのか？」

「うん、いいよ。それに、イルーシャってことになってるのに、ユーキって呼ばれてたら都合が悪いでしょ？」

「それはそうだが……」

「あ、あと、わたしががさつで口が悪いってもう周りの人にばれるみたいだから、もう猫被らなくてもいいよね。公の場ではちゃんとお姫様やるつもりでいるけど」

「うん、それでいいと思うよ。君はそのままの方が魅力的だし」

「キース、どさくさに紛れて口説くな。……俺もそれには異論はないがな」

キースを牽制しつつ、カデイスが偉そうに同意した。

「よかった……。ありがとう」

そのままの自分で振る舞うのを反対されるのが一番の心配だったから、正直ほっとした。

「別に礼を言われることでもない」

「それでも、ありがとう。嬉しい」

結構無茶な要求かなって思ってたから、認めてくれて本当によかった。そう思っただけで微笑む。

落ち着いてくると、庭園に目をやる余裕ができた。
咲き乱れる花々。風に舞う花びら。

なんて綺麗なんだろう。

この世界でわたしはもう一度生きるんだ。

そのために、今やらなければいけないことがある。

「ね、早速だけど、わたしの名前呼んでみて」

「ユ……イルーシャ」

「……イルーシャ」

うん、わたしはイルーシャ。

わたしは二人に向き合っただけで微笑んだ。

これは原田由希に決別して、イルーシャとして生きていくための儀式だ。

消えゆくもう一人のわたしを思って、涙が自然と頬を伝っていく。
「……もう一度呼んで」

「イルーシャ」「イルーシャ」

二人の優しい声に涙を堪えられなくて、わたしは顔を覆う。

「……うん」

これでもう、わたしは原田由希じゃない。わたしはイルーシャだ。けど、わたしの本質は変わらないから、それでいいよね。そう思うのに、涙が止まらないのはなぜだろう。

風が優しく吹いてわたしの髪をそつと揺らしていく。
二人がまたわたしの名前を呼ぶ。

「うん」

イルーシャはわたし、わたしはイルーシャ。

この世界でわたしは新しい生を刻む。

そして、今度こそ後悔しないように生きていくから。

10 カデイスからの求婚

「いい香りー」

芳香を放っている花に顔を寄せてわたしはその香りを楽しむ。
最近のわたしのお気に入りは庭園。

散策しながら花を楽しむのが朝の日課になっている。

「イルーシャ」

「あれ、カデイス、おはよう。執務はどうしたの？」

「……無粋なことを言うな。せつかくおまえに会いに来たのに」

「……イザトさんに怒られても知らないよ」

イザトさんの名前を出したら、カデイスがちよつと動揺した。

そうか、カデイスもイザトさんが苦手なのか。イザトさん、見るからに厳しそうだもんね。

「それはそうと、おまえに伝えたいことがあるんだが」

「なに？」

首を傾げる私の髪をカデイスの大きな手が梳く。

「イルーシャ、俺はおまえが好きだ。俺の妃になってほしい」

「え……」

わたしは瞳を見開いてカデイスの真剣な顔を見返す。

「俺にはおまえ以外の女を妃に据えるなど考えられない。……考え
ておいてくれ」

「そ、そんな……」

カデイスの突然のプロポーズにわたしは狼狽えるしかない。

「そんなこと突然言われても……、困る」

「困る？ どうしてだ、おまえは俺が嫌いかな？」

カデイスの真摯な視線を受けて、わたしは顔に血が上るのを感じた。

「き、嫌いじゃないけど……」

そりゃ、出会った当初は大嫌いだったけど、今はなんだかんだ言

つてお世話になってるし、カデイスには感謝してる。でも好きかと聞かれたら、よく分からない。

わたしはどうしていいか分からなくて視線をあちこちに彷徨わせる。すると、あるものに目が行った。

あ、あれ、ひよつとしてっ。

「お、おいっ!？」

いきなりその場からダッシュしたわたしに驚いたらしいカデイスが声をあげる。

目的のものの側に駆け寄ったわたしはあちこちそれを観察する。幹の色や花の形、花の付き方といいこれは。

「……やっぱり桜だあ……」

感激して、思わず幹に抱きつく。

「エーメの樹じゃないか」

わたしを追ってきたカデイスが樹を見上げて言う。

「こっちではエーメって言うの？　桜がこっちにあるなんて思わなかったから嬉しいな」

「……抱きつくほどその花が好きなのか？　どうせ抱きつくなら俺にしてほしいが」

「うん、大好き!」

にっこり笑って言ったら、なぜかカデイスが目元を赤く染めた。いや、大好きなのは桜のことであって、カデイスのことを言ったわけじゃないよ。

「そ、そうか。そんなにエーメが好きならもつと庭園に植えさせるが」

「うーん、庭園も悪くないけど、桜並木の方がいいなあ」

「並木道か。そう言えば、師団への道が殺風景だったな。早速植えさせるか」

「本当!?　楽しみー。日本ではね、夜になると照明付けて夜桜見物とかしたんだ。あれは綺麗だったなあ」

わたしはうつとりとその時の情景を思い返す。

「そうか、それはいいな。夜に花を観賞するか、なんとも趣がある催しだな」

「でしよう？」

実態は飲んで騒ぐのが目的な人も多いんだけどね。まあ、それを言ったら台無しなのでやめておく。

「……ところで俺の妃の件だがな」

わ、忘れてなかったんだね……。

内心冷や汗をかきながらカデイスに向き合うつ、わたしは彼に抱き寄せられた。

「カ、カデイス……」

その腕から逃げ出したかったけど、思いのほか強い力で閉じ込められていて、それは叶わなかった。

「は、離して……」

わたしは真っ赤になつて身を擦る。

「断る、と言ったらどうする」

「こ、困るよ。どうしてこんなことするの？」

「おまえは先程の俺の言葉を聞いていなかったのか？ 俺はおまえが好きだと言っただろう」

き、聞いてたけど、でもっ。

カデイスは右手を挙げてわたしの頬に触れた。親指でそつと唇をなぞられてわたしはびくりとする。

「イルーシャ、怖がるな」

カデイスが苦笑したけど、わたしは首を横に振るしかできなかった。

「む、無理だから……っ」

正直、カデイスに支えられてなかったらこのまま倒れそう。

「……仕方ないな」

そう言つと、カデイスはわたしの額にキスをした。

「本当は唇に口づけたいところだがな」

その言葉で、わたしは耳まで赤くなつて抗議する。

「駄目駄目、絶対駄目！」

「……キースには許したじゃないか」

「あ、あれは、不可抗力で……っ」

「なるほど、不可抗力か」

あれ、なんか微妙にカデイスの目が据わってる。え、え、なんか顔が近づいて来てるような気がするんだけど！

「カデイ……ッ」

仰け反ろうとしたら、頭の後ろに手を添えられてわたしは動けなくなる。

おもむろにカデイスは顔を傾けると、わたしに口づけた。

「や……っ」

一度目は軽く、二度目は長い長いキス。

もう駄目、酸欠になりそう。

くたつと力の抜けたわたしを支えながら、カデイスが苦笑した。

「息をしないやつがあるか」

いや、頭では分かってるんだけどね……。

わたしは肩で息をしながら、カデイスに寄りかかる。そんな状況の中でカデイスは楽しそうにわたしの髪を撫でていた。

「おまえの言い分からしたら、これも不可抗力だな」

「……あのねえ……」

なんというか、どっと疲れた気分だ。

「恋人でもないのに、そんな簡単にキスしたりしないですよ」

「だから、俺の妃になれと言っている」

どこまで俺様なんだ、カデイス。

「わたしは承諾してないでしょ。……とにかく離して」

そうは言ったものの、脚に力が入らなくてフラフラしていたら、カデイスに抱き上げられた。

こ、これはいわゆるお姫様抱っこ！

「ちよつとカデイス、わたし歩けるからっ。降ろして！」

「説得力がないぞ。まともに歩けないだろう」

う……っ、そうなんだけど、さっきから晒されている好奇の視線が気になって仕方ない。

「だって、恥ずかしい……」

わたしは赤くなつた頬を両手で隠した。

「おまえは時々、すごく可愛いな」

「わ、わたしが可愛いとか、ありえないからっ」

カデイスの言葉に本気でびっくりして言い返す。わたしはむしろ可愛くない性格だと自負している。

「褒めたんだ、素直に受け取れ」

「え、と。う、うん……」

なんとか頷いたものの、わたしは気恥ずかしさから真っ赤な顔で俯くしかなかった。

「そんな顔を他の男に見せるな。特にキースには」

「え、なんで？」

カデイスがなんでそんなことを言うてくるのか分からなくて、顔を上げて聞く。

「それは、やつが獣だからだ」

……カデイスつてば、以前、キースに獣と一緒にって言われたのを気にしてたんだ。

「……それはカデイスもじゃない」

「俺はいいんだ」

「いや、良くないから!」

ここで強く言うておかないと、被害がまたわたしに及ぶ。

むうと睨むと、カデイスは仕方なさそうに溜息をついた。

「……一応自重はする」

そんなやりとりがあつたのが十日程前。わたしは再び庭園の散策に出ていた。

「イルーシャ様、おはようございます」

「おはよう」

ヒューとブラッドにばったり出会って、朝の挨拶を交わす。

「イルーシャ様、師団への並木道のこと、ありがとうございます」
「陛下がおっしゃってましたよ。エーメの樹を植えることを提案されたのは、イルーシャ様だと」

「え、あれ、もう完成したの？ それを言ったのは、十日くらい前なんだけど」

「ちょっと早くない？ あまりの仕事の速さに驚いていると、ヒューが言った。」

「ええ、我々騎士団も出たの急のことでしたが、おかげで素晴らし
い出来映えで……」

「騎士団まで出張したの？ なんか、悪いことしちゃったみたい」
わたしの一言でそんな大事になっていたとは知らなかった。今後は発言に気をつけなくちゃ。

「いえいえ、そんなことはたいしたことではないですよ。イルーシ
ヤ様のおかげで殺伐とした我々の宿舎にも潤いが出たというもの
です」

反省するわたしに、ブラッドが微笑んだ。

「そう言ってくれるなら、嬉しいけど……」

わたしは二人に師団への並木道まで案内して貰った。そこでわた
しが目にしたものは。

「な……っ、なにこれ」

「見事なものでしょう？ ちょっとした名所になりますね、これは」
ヒューが感嘆したように溜息をついた。

確かに見事だ。でもわたしはカデイスにここまでしてとは言わな
かった。

満開の桜並木……、はまあいいとしてその樹の大きさ！

背の高いブラッドやヒューの身長を軽く超す樹の高さ。幹も何年
も年月を重ねたらしく立派だ。

「こ、これ、どうやって運んだの？」

「それは魔術師団が移動魔法で運んだんです。ちょっと壮観でしたよ」

……この大きさの桜の樹を何百本と運ぶんだもの、それはそうだろうね。

思わず引きつった笑いを浮かべていると、二人が心配そうに声をかけてきた。

「イルーシャ様？」

「もしかして、お気に召さなかったのですか？」

いや、桜並木はとっても綺麗で気に入ったけど。

「……カデイスがここまでやるとは思わなかったのよ。せいぜい、道沿いに桜の苗木を植える程度だと思ってたし。これ、いったいいくらかかっているのよ」

この桜の樹一本だって相当の値段のはずだ。

「イルーシャ様、陛下からの贈り物の値を聞くなんて野暮というものですよ」

「いや、だってこれ、国民の税金でしょ？ わたし嫌だからね、」

あの女のせいで国庫を圧迫した」なんて言われたら！」

わたしがそう捲し立てると、ブラッドは目を白黒させた。

「そ、そういうことですか……」

「イルーシャ様、しっかりされてますね……」

ヒューはぽかんと口を開けていたけど、しばらくしてから妙に感心したような口調で呟いた。

11 桜並木と師団舎と

「ちょっとカデイスに抗議してくるっ」

「まあまあ、せっかくここへ来たんですから、師団舎まで案内しますよ」

身を翻して駆け出しそうになったわたしをブラッドが引き留めた。

「あ……、うん。そうだね、せっかくだからそうしようかな」

「エーメの並木道をご覧になって行かれると良いですよ」

「うん」

カデイスに文句の一つも言いたいところだけれど、植えてしまったものしょうがないものね。ここは二人の言葉通りにしよう。

わたし達三人は桜の花びらが舞う並木道をゆつくりと歩いて行く。カデイスにはびつくりさせられたけど、桜は本当に綺麗で自然に微笑んでしまう。

「……なんとも幻想的ですね」

「うん、そうだね」

ヒューの言葉に頷くと、彼は首を横に振ってそれを否定した。

「……イルーシャ様がですよ」

「え？」

「エーメの花がとてもお似合いになるのですね。陛下がイルーシャ様を溺愛されるのも良く分かります」

「え……」

そんなことを言われるとは思ってもいなかったわたしは、かあつと赤くなる。

「溺愛って……、そんなことないよ」

「この植えられたエーメを見て、そんなことを言われるんですか」

た、確かにこれは常軌を逸していると思うけど。

「そ、それはわたしがこの容姿だからだよ。たぶん、カデイスがわたしを好きだって言うのも気のせいだと思うな」

「……陛下があなたに好きだと告白されたのですね？」
「あ」

しまった、言わなくてもいいことまで言っちゃった。わたしは慌てて口を塞いだけでもう遅かった。

「そして、王妃にと望まれていると」

ヒューの言葉を引き取って、ブラッドが言う。

「な、なんで知ってるの？」

ここまで来るとわたしはうろたえるしかない。

「陛下が俺達を集めた席でイルーシャ様を妃にしたい、本人にも求婚したとおっしゃってましたよ」

「ええっ、嘘っ」

みんなの前でそんなこと公言されるなんて恥ずかしすぎる。わたしは真っ赤になって頬を押さえた。

「……あれは俺達に対する牽制でもあるんでしょうね。特にキース様への」

「え……なんでキースが出て来るの」

そもそもヒュー達への牽制ってなんだ。

「陛下とキース様があなたをめぐっての恋敵同士であるということ
は有名ですよ」

「う、嘘……」

なんでそんなことが有名になってるわけ？

「なんでも庭園で殴り合いをしたとか。俺もそれを聞いたときは自分の耳を疑いましたよ。あのキース様が陛下を殴ったんですよ」

今でも信じられないと言うようにヒューが首を横に振る。

「えええっ、キースが!？」

そんなこと初めて聞いたよ。

あの掴み所のないキースがカデイスを殴ったなんて。

「あの時そんなことがあったなんて……」

「あの時？」

「うつん、なんでもないっ。いくらキースでも、カデイス殴って大

丈夫なの？」

「確か二日間の謹慎処分になられていたはずですよ。その後なぜか五日に延びてましたが」

わたしがイルーシャとして生きていくと決意表明したとき、キースは既に謹慎処分中だったのか。ひよつとして謹慎期間が延びたのわたしのせい？ ああ、なんか罪悪感が……。

「殴り合いをするなんて余程のことですよ。なにかあったんですか？」

「無粋なことを聞くなよ、ヒュー。色恋のことに決まってるじゃないか。たとえば口づけとか」

唇をなぞるブラッドの視線をたどってヒューがわたしを見る。

「っ」

言い当てられたわたしはただただ真っ赤になるしかない。恥ずかしすぎて涙までにじんできた。

「そんな可愛い顔をされると、陛下でなくてもぐらつきますね、イルーシャ様」

「ブラッド、からかわないでよね」

「からかってなんかいませんよ。イルーシャ様はとても可愛らしいです」

まだ言うかつ。それならこうだ！

わたしはブラッドの両頬を摘んで引つ張ると、ハンサムな顔が間抜けになった。……ちよつと笑えるかもしれない。

「……なにしてるんですか、イルーシャ様」

痛むらしい両頬を押さえてブラッドが言う。

「ブラッドがふざけるからよ。誰にでもそついうこと言うのやめてよね」

「なにか誤解があるようですが、誰にでも言っているわけではありませんよ」

「……どうだか」

この間、よく知りもしないわたしに対して色目を使ったのはまだ

忘れてないぞ。

わたしはブラッドに冷ややかな視線を浴びせる。

「陛下がイルーシャ様が時々妙な行動に出るとおっしゃってましたが、直に身に受けることができて光荣ですよ」

「妙な行動って……」

……それは、つまり奇行ってこと？

ひくりとわたしの頬が引きつる。

カデイス、わたしのことそう思ってたんだね。そんな女に告白するってどういうこと？

それにブラッド、その反応はおかしくない？　なんでそんなに嬉しそうなんだ。

「……ブラッド、イルーシャ様に対して言葉が過ぎるぞ」

ヒュー、もつと言ってやって！

「しかし、イルーシャ様は大変魅力的な方だ。これには同意するだろう？　ヒュー」

「……まあ、それはそうだな」

えええ、ヒューまで！　これってなんのほめ殺しよ。

「そういえば、陛下とキース様がイルーシャ様の異世界での知識はすごいと褒められてましたよ」

ふと思いついたようにヒューが言う。

「え……、別にすごくなんかないよ。わたし中途半端な知識しかないもの」

そんなことヒュー達に話してたんだ。居心地悪すぎて、なんだか背中あたりがムズムズする。

役に立ちそうな専門的な知識もないし、二人共わたしを買いかけりすぎだよ。

「でも、陛下は消費税を導入して、教育を義務化することを検討されてますよ？　それはイルーシャ様の意見だそうですが」

「……ああ、そういえばそんなことを言ったかも」

晩餐の席でカデイスとキースにいろいろ聞かれた時言っただけ。

でもいきなり課税されたら国民の反発もあるだろうから難しいかもってカデイスには言ったはずだけど。

「国庫を心配したりする姫もイルーシャ様以外いませんね」

「いや、あれは単にわたしが悪く言われるのが嫌だったからで、そんな意図で言ったわけじゃないよ……」

ヒューに褒められるようなことはなにも言っていないぞ。わたしとしては、むしろ計算高い言葉じゃないかと思う。

「国民の税金なんて発想は普通の姫にはありませんよ。それだけでもすごいです」

「いや、税金納めてる庶民だったらそういう発想すると思うよ。日本ではわたし一応働いてたし」

「しかし、人間贅沢には慣れるものですよ。それなのに変わらずにいられるところが、イルーシャ様のすごいところですよ」

「も、もうやめてよ。そんなに褒められると恥ずかしくてしょうがないよ」

真っ赤な顔の前で慌てて手を振るわたし。

「やはり、イルーシャ様は可愛らしいですね。ちょっとした仕草とか、褒められると赤くなれるところとか」

「も、もういいよ。師団舎案内してくれるんでしょ？ 早く行こうよ」

これ以上聞いていられなくて慌てて駆け出すわたしの後ろから、くすくすと二人の笑い声がした。

「イルーシャ様、手前右側が紅薔薇、左が白百合、奥右側が近衛、左側が魔術師団になります」

二人に案内されて師団舎に着くと、ざっと説明してもらった。

三階建ての建物がそれぞれ道を挟んで並んでいる。四つともとても似ている建物なので説明してもらってよかった。

ちなみに魔術師団は女性もいるけど、他の団は男性しかないんだとか。

「ふうん、そうなんだ。女の人でも入れるといいのにね」

「まあ、男の中に女性を入れるといういろいろ問題も出てきますからね」

……そういうものなのか。女の人が男社会に進出するって難しいんだな。

そんなことを考えながら、紅薔薇騎士団の師団舎に入る。ちょうど訓練中のようで、かなりの人数の騎士さん達が剣を振っていた。

「イルーシャ様だ……」

「ほ、本物……」

いきなり注目を浴びて、わたしは焦って二人を見る。

「大丈夫ですよ。とって食いやしません。……たぶん」

ブラッド、……たぶんってなんだ。

「絵姿より綺麗だなあ」「だな」

そんな呟きが耳に入ってきて、わたしは首を傾げる。

「絵姿ってなんのこと？」

「王宮でイルーシャ様の絵姿を発行してるんですよ。これが発行するとすぐ売り切れる人気で……知らなかったんですか？」

「うん、知らなかった。カデイスってば、なんで教えてくれなかったんだろ」

「憶測ですが、愛している女性の絵姿を他の男が持つてることを知らせたくなかったんじゃないですか？」

「愛し……」

かあつと赤くなった途端、周りがもつと騒がしくなった。

「おおつ、赤くなったぞ。可愛いなあ」

「団長、イルーシャ様を口説いてるんですか」

「おまえら、うるさいぞ」

ブラッドがそう言っても騒ぎは収まらない。

ブラッドは溜息をつく、わたしに向き合った。

「イルーシャ様、彼らになにか声をかけてくれると助かります」

そう言われても……、いったいなにを話せと？ まあ、日頃練習しているお姫様スマイルを披露するチャンスだと思えばいいか。

渋谷騎士さんの集団に近寄っていった、おもむろにわたしは口を開いた。

「皆さんおはようございます。あの……鍛錬頑張ってくださいね」

につこり微笑んでそう言うと、うおおおお、という雄叫びが響いてびつくりした。

「イルーシャ様！ 俺、頑張ります！」

「お、俺も！」

「俺も頑張ります！」

「……なにかすごいですね……」

ヒューが呆然としたように呟いたけど、それにはわたしも同意だ。「動機が不純でも、やる気を出してくれるのはいいことですよ。……

……イルーシャ様、これからは是非こちらにいらしてください」

動機が不純って……、つまりわたしはアイドル状態ってこと？

につこり笑うブラッドと俄然はりきって剣を振る騎士さん達をわたしはそれぞれ見やる。

「……分かった。そうする」

ブラッドも結構黒いかもしいなと思いつつわたしは頷いた。

12 師団舎訪問と予想外の出来事

「あいつら、後で鍛え直す」

ヒューが憤ったように拳を握って言う。

あの後、白百合騎士団にも行ったけど、わたしに対して紅薔薇と大体同じような反応だったのが団長としてショックだったようだ。

「ヒューの地の言葉って結構荒いよね。だったら、もうちょっと碎けた言葉で話してくれてもいいのに。……それで出来れば友達になつてほしいな」

「……無理ですよ。立場というものがありませんから、そういうわけには参りません」

予想はしてたけど、つれない返事が返ってきてわたしは肩を落とす。

「立場かあ。結構面倒だよ、それ。わたしに普通に話してくれるの、カディスとキースくらいだし。アイリン姫とは仲良くなれそうだったけど、姫、忙しくなっちゃって会えないし」

なんでも、幼なじみとの婚約式の準備で忙しいんだとか。

地を出して話しかけた時にはびっくりしてたけど、そちらの方が魅力的ですって笑って言うてくれたのにな、姫。

「陛下やキース様と同等に話すわけには参りません。……アイリン姫は時期が来ればまたお会いできますよ」

「……うん」

イルーシャとして生きるってことは、王族として生きるっていうことなんだよね。

それなりの覚悟はしてたはずだけど、普通に話してくれる人が少ないのは、やっぱりちよつと寂しい。

「あ、でも近衛に親しくなれそうな子はあるんだ。マーティンっていうの」

「ああ、マーティンですか」

ブラッドが納得したように頷いた。

「あ、やっぱり知ってるんだ？」

「彼は若いですけど、有名ですよ。近衛団の団長と侍女長の息子ですからね。それでいて、気さくで飾らない人柄で実力も兼ね備えていますから、人望もありますし。将来、団長になることを約束されたような人物ですよ」

「へえ、マーティンって、そんなすごかったんだ」

感心しながら、二人と近衛の師団舎へと脚を進める。

近衛団は、紅薔薇や白百合騎士団よりは落ち着いた感じの人が多
いみたい。ダリルさん達に挨拶したら、ごく穏やかな返事が返つてきた。

「さすがに近衛は違いますね」

「まあ、陛下や王族お付きの師団と我々を比べること自体が間違ってると思うぞ」

ヒューがちよつと悔しそうにして言つたのをブラッドがフォローした。

「近衛ってエリート集団なんだね」

そんなところにマーティンいるんだ。すごいなあ。……ところで、彼はどこにいるんだろ？

舎内を見回していると、ちょうどマーティンがこちらに向かってくるところだった。

「あ、マーク……じゃなかった、マーティン、おはようっ」

危ない、危ない。ついマー君と呼んじやうところだったよ。前にうっかりそう呼んじやったことがあって、怒られたんだよね。

「イルーシャ様、おはようございます。……ところで、今なにか変なことを言いかけてませんでした？」

「え？ 気のせいじゃない？」

わたしはそらつとぼけた。……ちよつとしらじらしかったかも。

「……イルーシャ様、マーティンと仲いいですね」

ヒューがちよつと硬い表情で言つた。……あれ、どうしたんだろ？

「うん、リイナさんにはお世話になってるから普通に親近感わくよ。マーティン、話しやすいしね。弟がいたらこんな感じかなあって思うんだ」

「弟ですか」

なぜかおかしそうにしてブラッドが口元に手をやる。

「一つしか変わらないじゃないですか」

うーん、弟は気に入らないか。

「分かったよ、弟扱いはしないから。じゃ、友達ってことでどうかな？」

「……イルーシャ様、ご自分が王族ってこと忘れてますね？ 一介の騎士が王族の方と友人になるなど恐れ多いです」

ええ、マーティンまでこんなこと言うんだ？

「でも、マーティン一応エリートじゃない。友達になっても問題ないよ」

「一応は余計です。……そのようなこと陛下がお許しになりませんよ」

「なにそれ。いくらカデイスでもわたしの交友関係にまで口出ししたりしないでしょ」

「ご友人が女性でしたら問題ないと思いますよ」

つまり、男性は問題ありだと？ なんでよ。

釈然としない思いで、わたしはマーティンを見返す。

「イルーシャ様、ご自分が陛下の想い人だということを自覚されてください。そんな方と親しくさせて頂くわけにはいきませんよ」

「……そんなこと言われても、わたしはカデイスのものじゃないよ。カデイスがわたしの友達のことであれこれ言う権利はないでしょ」

カデイスにはお世話になってるけど、そこまで干渉されたくない。「じゃあ、わたしカデイスに友達は自分で選ばせてくれって直談判するよ」

「やめてくださいよ。俺が陛下に睨まれるじゃないですか」
本気で切実そうにマーティンが訴えた。

え、駄目？

「なら、『許可してくれなかったら、嫌いになるから』って言うよ。これで文句言ってきたら本当に嫌いになるかもだけど」

「なるほど、それなら陛下も文句は言えませんか」

おかしそうにブラッドが笑った。

「……そういう問題じゃないような気がするんですが」
ちよつと疲れたようにマーティンが言う。

「……立場があるので口調までは変えられませんか？」
これって、了承ってことだね？

「うん、わかった。マーティン、ありがとう」

嬉しくなって笑ったら、マーティンもちよつと笑ってくれた。

「ブラッドやヒューもこれを機にわたしの友達になってくれると嬉しいな」

「そうですね。陛下の許可が下りましたら、問題ないですよ」

ブラッドは笑って頷いてくれたけど、ヒューは黙ったままだ。さつきも拒否されちゃったし、やっぱり無理なのかな。

「……ヒューはどうか？」

内心の不安を隠しながら聞くと、ヒューは溜息をついて首を横に振った。

駄目だったかと思つてしょんぼりしかけたけど、次にはヒューが花のように笑つて言った。

「……イルーシャ様には、本当に負けますね」

わたしは浮かれながら魔術師団の宿舎までの道を歩いていた。

桜並木は綺麗だし、友達も出来そうだし、正直スキップしたい気分だ。

桜並木の件ではカデイスに文句言つてやろうと思つてたけど、それは必要最低限に抑えとこう、とわたしは心に決める。

「イルーシャ、よく来てくれたね」

キースが入り口で出迎えてくれたので、ヒューとブラッドはお役ご免と言うことでそれぞれの宿舎に帰っていった。

キースに案内されて、師団の人達に挨拶する。ここの人達も近衛の時のように反応が穏やかだ。

「ここは師団で唯一、文官と武官が一緒にいるからね。そのせいもあると思うよ。……それはそうと、そんなに熱烈的な歓迎を受けたのかい？」

「それはもう。挨拶しただけで叫ばれたんだもの、びっくりしたよ。わたしがそう言つと、キースは前髪を掻き上げて苦笑した。

「……猛獣の群れに兎を放り込むようなものだね。今日はブラッドレイとヒューイがついてみたいけど、師団を訪れるときは近衛か、傍にいれば僕を連れて行くといいよ」

「え……、近衛の人はともかく、キース忙しいでしょ。悪いよ」

「遠慮しないでいいよ。それに僕は君の傍に出来るだけいたいんだからね」

「え、あの……。あ、ありがとう」

どう反応していいか分からなくて、赤面しながらなんとかお礼を言う。

「どういたしまして。今お茶出すから、座つて」

キースに促されてわたしは応接セットの椅子に腰掛けた。出されたお茶を飲んで一息つく。

「あ、そういえばキース、カデイスと殴り合いしたつて本当なの？」

「ああ、聞いたんだ。本当だよ。僕はカデイスを殴つた」

「ど、どうして……？ あなたがそんなことするとは思わなくて、聞いたときはびっくりしたよ。もしかしくなくても、わたしのせい、だよな？」

「あの後、カデイスが君を無理矢理にでも王妃にするって言つから、つかつとなつたつてというのが真相だよ。あの時のカデイスもどうかしてたけどね」

「カデイスが、そんなこと……。酷いよ、わたしの意思はどうでもいいわけ？」

わたしへの求婚をわたし以外の人に知らせたこともそうだ。カデイスは勝手すぎるよ。

「イルーシャ、カデイスは焦ってるんだよ。君がいつ誰かに浚われてしまわないかね。……僕もそうだ」

なんで二人が好きなのがわたしなんだろう。

わたしは膝の上でぎゅっとドレスを握りしめる。

「わたし……、そういうのよく分からない。本当言うと、あなたやカデイスがわたしを好きって言うのもわたしがこの容姿だからだと思ってる」

「イルーシャ」

キースはわたしの隣に腰掛けると、わたしの手にその手を重ねた。「君じゃない君なんて、僕は興味ないよ。僕が好きになったのは、ときどき思いもよらないこととして、口が悪くて、強いのに弱くて、恥ずかしがり屋の君だ。……これはたぶんカデイスもそうだよ」

「わたし、そこまで好かれるような可愛い性格でもないよ」

「それは君が気付いてないだけだよ。君はとても可愛いし、魅力的だ」

キースの手がゆっくりとわたしの髪を梳く。

わたしは動けずに、ただキースの顔をみつめていた。

「君を愛してる。……僕の妻になってほしい」

13 友達選びでカデイスと対決

「え……と……、わたし……」

なんて、答えたらいいんだろう。

キースにまでプロポーズされると思ってたわたしは、真っ赤になってうろたえていた。

「わ、わたし、キースのこと嫌いじゃないけど、結婚とかそんなこと考えられない」

「……嫌いじゃないけど、好きでもないってこと？」

「友達としては好きだよ。それじゃ駄目なの？」

「僕はそんなことを望んでるわけじゃない。君の特別になりたいんだ」

「わ、わたし、わたし……」

いったい、なんて言ったらいいんだろう。軽く混乱していたら、キースに腕をとられた。そのまま彼に抱き寄せられる。

「キース……ッ」

キースがわたしの頤をそつと持ち上げる。

「……このまま君を閉じこめてしまいたいよ。誰にも見せずに、ずっと僕だけのものにしてしまいたい」

キースの瞳の中に狂おしいほどの熱情を見た気がして、わたしはびくりと体を震わす。

「イルーシャ、怖がらないで」

そんなの無理だよ。だって、いつものキースはこんなこと言わないじゃない。今日のキースはまるで別人みたいに覚えて、体の震えが止まらない。

「……キース、お願いだから離して」

やっこの思いでそう訴えると、キースの腕が緩んだ。

「ご、ごめん。わたし、もう自分の部屋に戻りたい」

わたし、こういうことに耐性なさすぎ。自分の経験のなさを嘆い

ても今更しようがないけど。

「……まいったな。そんなに怖がらせるつもりはなかったんだけど……。君の部屋に送ればいいんだね？」

「……うん、ごめんね」

キースの移動魔法で自分の部屋に戻ったわたしは真っ直ぐに寝室に駆け込んだ。

ぼすんと音を立てて、ベッドにうつぶせに沈むと、こみ上げてくる恥ずかしさに身悶えた。

わたしは恋がどういうものか知らない。

それなのに二人がわたしにプロポーズしてくるなんて、どうしてもいいか分らないよ。

日本にいた頃は二十代後半くらいで結婚できたらいいなと漠然と思ってたけど、相手がいたわけでもないし、身近な男の人っていったら、お父さんかバイト先の人達くらいだった。

年齢イコール彼氏いない歴のわたしには、二人からの告白は正直重い。

それなのに、恋愛を通り越して突然結婚してくれなんて二人とも飛躍しすぎだよ。

衝動のままに、手足をばたつかせて暴れていたら、ちょっと落ちて着いてきた。

「……二人とも本当にどうかしてるよ……」

わたしはベッドから身を起こすと、溜息をつく。

キースの言葉によると、わたしの性格含めて二人はわたしのことが好きらしい。

今まで好かれているのを容姿のせいにして逃げてきたけど、いい加減わたしも覚悟を決めて認めなきゃいけないのかもしれない。

「……あ、そうだ」

わたし、カデイスに言いたいことがあったんだっけ。忘れないうちにカデイスのところに行ってこなきゃ。

カデイスと二人きりになるのは気まずいから、できれば執務室に

イザトさんがいてくれるといいなあ。

「よく来たな、イルーシャ」

カデイスの執務室を訪れると、最初に会った時の態度とは雲泥の差の対応をされた。

あの頃はカデイス、すごく意地悪だったんだよね。それが、今はこの歓迎ぶりなんだもの。人って変わるものなんだな。

……カデイスの場合、変わりすぎて感じただけ。

お茶を出されてカデイスと向き合つと、わたしは部屋の中を見回した。

「……イザトさんはいないの？」

「……なんだ、イザトに用だったのか？」

カデイスが、心なしがっかりしたような顔になる。

「うつん、そうじゃないけど」

「？ おかしなやつだな」

わたしの心労も知らずにカデイスが不思議そうな顔をする。

「今日は、カデイスにいくつか話があつて来たんだ。……時間いいかな？」

「ああ、大丈夫だ。いくらでも時間を空けるぞ」

「……いや、あまり空けられても困るんだけどね……。カデイスも仕事あるでしょ？」

「まあ、それはそうだが……」

なんだか歯切れが悪い。……これは仕事がたまつてるんだな。

「俺も、おまえに話さなければいけないことがあるんだが」

「なに？」

「例のおまえの披露の日取りが決まった。一月後だ」

「そっか、とうとう決まったんだね」

「おまえの礼儀作法も様になってきたし、そろそろ頃合いかと思つてな。周りからもつたいぶるなと突かれているしな」

カデイスによると、バルコニーで国民に顔見せしてから、馬車で

市内をパレード、夜には舞踏会というスケジュールなんだそう。

「……なんか、忙しくない？」

「ああ、忙しいぞ。おまえは特に色々準備もあるはずだしな」

「うわあ……。お姫様やるのも楽じゃないねえ……」

殺人的スケジュールに早くも挫折そうわたし。

「俺も側にいるから心配するな。辛いようなら言え。息抜きさせる時間くらいは作る」

「……ありがとう、カデイス」

いつも不器用なカデイスの心遣いが嬉しくて、わたしは微笑む。
「無理させておまえに倒れられては困るからな」

カデイスが腕を上げてわたしの髪を撫でる。その顔は優しく、カデイスの好意が伝わってきた。

わたしはカデイスの気持ちに心えられないことが心苦しくて、彼からそつと視線を逸らす。

「あ、そうだ。桜並木の件なんだけど」

「ああ、見たのか。どうだ、見事なものだったろう？」

「いや……。見事は見事なただけだね……」

「なんだ、気に入らなかったのか？」

不満そうにカデイスがわたしを見る。

「……桜はとっても綺麗で気に入ったよ。でも、あそこまでやられると思っただけから、びっくりにしたんだけど」

「……やりすぎたか？」

「それはもう。あんな立派な樹じゃなくて、苗木で良かったんだよ。あれ、いったいくらかかってるの？ わたしの言ったことで国民の税金がたくさん使われてるかと思うと申し訳ないよ」

「そうだったのか、おまえが喜ぶかと思っただけで済んだが……」

「……」

「……」

「い、いや、悪かった。俺が考えなしかった。……それはそうと、

イルーシャ、おまえ国民の税金のことまで考えてるのか」

「だって、わたし中身は庶民だもの。どうしたって気になるよ」
そう言うと、カデイスは感心したような顔をした。

「おまえはすごいな。贅沢にも慣れず、国民のことを考えられる。

……やはり、おまえを選んだのは正解だったな」

「え……、えっと……」

カデイスが手放して褒めるので、わたしは赤くなるしかない。

「だから、あの、気持ちはありがたかったけど、わたしの為にあまりお金使わないでほしいな」

「おまえは本当に欲がないな」

カデイスが仕方なさそうに溜息をつく。

「それで、わたしの絵姿発行してるって聞いたんだけど、その売上を桜並木にかかった費用に充てられないかな？」

「……聞いたのか」

「うん、ブラッド達にね」

わたしのその答えが気に入らなかったらしく、カデイスは眉を顰めた。

「……あまり他の男と仲良くするな」

「……なんで？」

「俺が嫉妬で狂いそうになるからだ」

「嫉妬って……、カデイス大袈裟だよ。ブラッド達は友達だもん。そんなこと心配する必要ないってば」

「おい……、友達とはどういうことだ」

「今日友達になったの。ブラッドとヒューとマーティン」

わたしがそう言うと、カデイスは目をむいて叫んだ。

「だ、駄目だ、駄目だ！ 男だけは駄目だ！」

「ええーっ、カデイス酷いよ。ただの友達だよ？」

「どちらが酷いんだ。おまえが友達と違っていても、向こうがそうだとは限らないだろう」

「そんなことありえないよ。カデイス、考えすぎ。そんなに心の狭

いこと言っんなら、嫌いになるからね？」

ちよつと首を傾げてにつこり笑うと、カデイスは頭を抱えた。

「……俺は今、おまえが悪魔に見えたぞ」

……失礼な。それなら、とことん演技してやるからね。

「友達くらい自分で選びたいじゃない。王族だからみんな遠慮するし、そういうのって結構寂しいもの」

沈んだように下を向いて言うと、カデイスはうつと詰まった。どうやら、カデイスにも覚えがあるらしい。

「……ねえ、どうしても駄目？」

目を潤ませて上目遣いに見ると、カデイスが明らかにうろたえた。「わ、分かった、認める。認めるから、そんな目で見るな！」

よっしゃあ！

わたしは心の中でガッツポーズを作った。

「カデイス、ありがとう。とても嬉しい」

「……ああ」

にこやかに笑うわたしと、燃え尽きたようなカデイス。

わたしが勝利に酔っていると、執務室のドアがノックされた。カデイスが入室を許可すると、入ってきたのはイザトさんだった。

「随分と賑やかですね。イルーシャ様、いらっしやいませ」

「イザトさん、お邪魔してます。あと少し要件を話したら、カデイスにきつちり仕事してもらいますから」

そう言ったら、イザトさんがくすつと笑った。鉄面皮だとばかり思ってたけど、珍しいものを見たなあ。

「さっきの話の続きなんだけど、わたしの絵姿を桜の代金に充てる件、考えてくれないかな？」

「……分かった、そうしよう。エーメの樹の件についてはそれほどおまえが気に病むことはないぞ。おまえの絵姿が飛ぶように売れていて、需要が供給に追いついていないらしいからな」

「うん、騎士さん達もわたしの絵姿持つてる人いるみたいだったね」
そう言うと、なぜかカデイスは顔をしかめた。

「……どうしたの？」

「いや、おまえの絵姿を他の男が持っているというのは嫌なものだな」

「変なの、ただの絵じゃない。それをいうなら、不特定多数に絵姿を持たれてるわたしの方が恥ずかしいよ」

わたしは笑って言ったけど、カデイスはまだ納得してないようでも不満そうだ。

「……ひょっとして、カデイスもわたしの絵持ってるの？」

「ああ、俺も何枚か持ってるぞ」

「そんなに持っててどうするの。一枚でいいじゃない」というか、一枚でも充分恥ずかしい。

「俺の部屋にいくつか飾ってある。それとしん……いや、なんでもない」

「……？」

カデイスがなにか言いかけてやめたのを不思議に思いながらも、わたしは椅子から立ち上がった。そろそろカデイスに仕事して貰わないとイザトさんが煩そうだ。

「じゃあ、わたしそろそろ帰るね。仕事頑張って」

イザトさんにも挨拶して、わたしは部屋を出る。

「……陛下、嘆かわしいです」

直前にそんなイザトさんの溜息混じりの言葉が聞こえてきたけれど、カデイスのなにが嘆かわしかったんだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0632ba/>

月読の塔の姫君

2012年1月10日22時49分発行